

綜 説

結核初感染ニ就テ

東北帝國大學教授

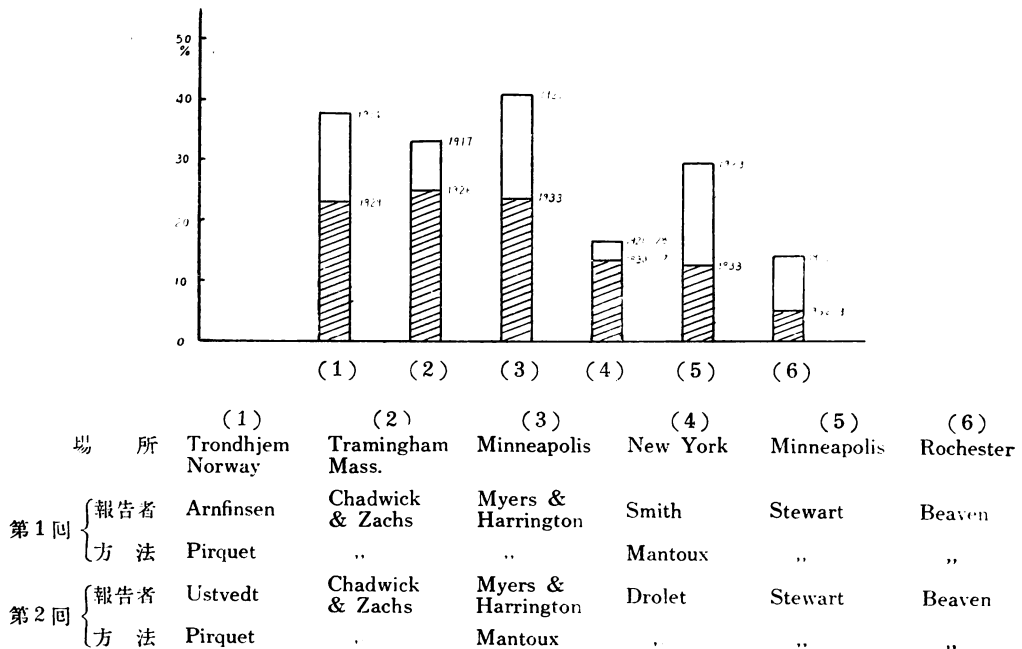
熊 谷 岱 藏

(I) 結核初感染症

最近結核感染及發病ニ關スル見解ガ漸次變化シテ來タ。昔時人類ハ少年期ニ於テ例外ナク一度結核感染ヲ經、成年期ニ至リテ再ビ外界ヨリカ又ハ既ニ自己ノ體內ニアル舊病竈ヨリ感染シテ茲ニ肺癆ガ成立スルモノデアルト信ゼラレ、唯歐米以外ノ新開國又ハ未開、半開國ニ於テノミ成年ノ未感染者アリ、之ガ爲メニ茲ニハ初感染ニ直ニ接觸シテ急劇ナ經過ヲトル肺結核ガアルト信ゼラレタモノガ近來歐米ニ於テモ約半數ハ

少年期ニ於テ結核感染ヲ受ケズシテ成年期ニ入り、青年ノ初感染ハ歐米ニ於テモ少ナクナイ事ガ漸次闡明セラレル様ニナツタ。今迄信ゼラレテ來タ様ニ少年期ニ皆結核ノ洗禮ヲ受ケル事ガ誤謬デアツタカ、或ハ昔時ハ是ガ事實デアリ近年ニナツテ感染ガ減少シタカト云フニ恐ラクハ雙方ガ事實デアラウ。近年ニナツテ特ニ歐米ニ於テ感染ノ減少シテ來タ事ハ次ノ表ヲ見レバ判ル。

第 1 表 「ツベルクリン」反應陽性率ノ年次の推移 (Beaven 氏報告ニヨル)

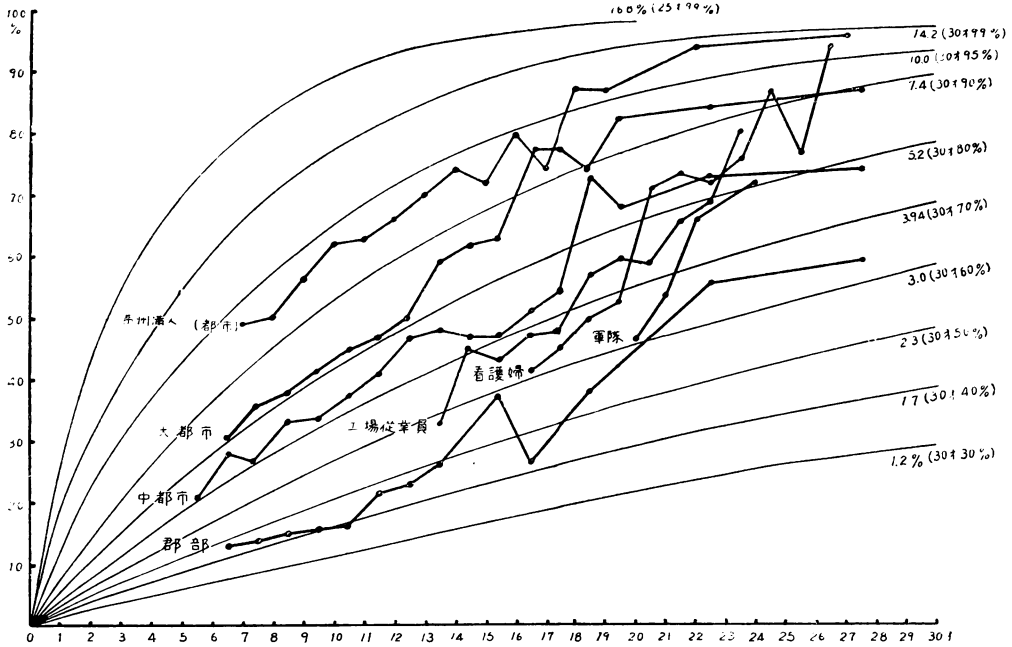


次ニ何歳ニテ皆「ツベルクリン」陽性トナル爲ニ年々感染スベキ百分率ノ純粹ニ數學的ニ計算

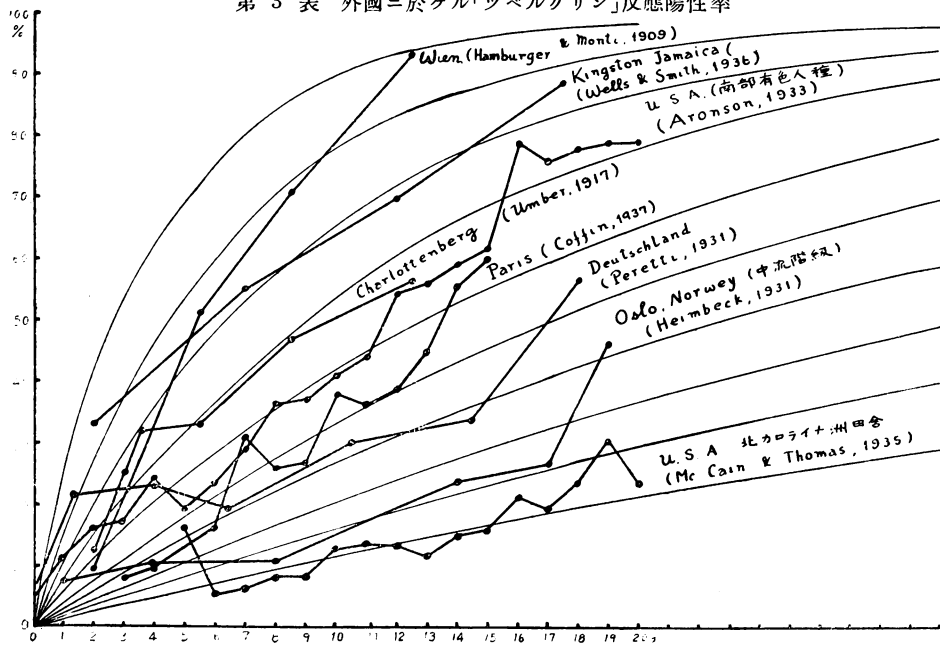
セルモノト、本邦及歐米ニ於テ實地ニ検査シテ
報告サレタ曲線トヲ表ヲ以テ示ス。之ニ依リテ
見ルト本邦ニ於ケル「ツベルクリン」陽性率ト歐

米諸家ノモノヲ比較スルト今日デハ本邦ニ於ケ
ルモノガ却テ歐米ヨリ多キ觀ヲ呈スル。

第 2 表 本邦ニ於ケル「ツベルクリン」反應陽性率



第 3 表 外國ニ於ケル「ツベルクリン」反應陽性率



(II) 初感染症ノ症状

(1) 初感染症ノ自覚症状

結核初感染ハ全然自覚症状ナクシテ經過スル事モアルガ多数者ニ於テ自覚症状ヲ起スモノデアル。然シ症状ハ多クハ全く不定ノモノデ最モ多イノハ感冒感、全身倦怠、熱感、發熱等デアル。其ノ他腹痛、消化不良、時ニ貧血、萎黃病、脚氣様症状、又ハ關節炎様症状ノアル事ガアル。次ニ余等ノ外來患者 280 例ニ就テ調査セル自覚症ヲ一括シテ示ス事トスル。

第 4 表 外來ヲ訪レシ際ノ初感染症患者ノ主訴患者數 280 名

自覚症状ノ種類	
I. 頭痛、熱感、感冒感、疲勞感等	142
II. 咳嗽、喀痰、盜汗等	104
III. 胸痛、肩凝、壓迫感、睡眠障碍等	78
IV. 胸痛、下痢、羸瘦、食慾不振等	18
V. 結節性紅斑	16 (5.7%)
VI. 「フリクテン」	13
VII. 脚氣様症状	5
VIII. 關節炎様症状	1

自覚症状ハ「ツベルクリン」反應陽轉ノ際又ハソノ前ニ來リ、又ハソノ後ニ來ル事モアルガ、自覚症状ナク經過スル者ハ余等ノ調査ニ依レバ全數ノ約 3 分ノ 1 デアル。

(2) 結節性紅斑及「フリクテン」

症状中特有ノ地位ニアルモノハ「フリクテン」及結節性紅斑デアル。一昨年リスボンニ於ケル萬國結核病學會ニテ瑞典ノ Scheel 等ハ 229 例中 212 例ニ結節性紅斑ヲ見タト報告シ、Sayé ハボルトガルニテ 33 例中 6 例ヲ見、Redeker ハ獨逸デハ稀有ナリト云ヒ、其ノ他ノ諸國ノ報告者ハ皆少イト云ツテ居ル。此ノ事ハ不可思議ニ見エルガ瑞典ノ Malmros 及ビ Hedvall ハ昨年ソノ著書ニ 151 例ノ初感染患者中症状ヲ起シタ者 47 例デ其ノ中ニ 9 例(約 6%)ノ結節性紅斑ヲ見タト報告シ、是等ノ例ハ皆女性ニテ Scheel ノ材料ハ女子ノミナルガ故ニ結節性紅斑多クシテ人種的ニスカンデナヴ、ヤ半島ニ之ガ多イノデ

ハナイト稱シテキル。コレナラバ余等ノ材料モ同様デアル。余等ノ 300 例ノ初感染症ニ於テハ 19 例(5.7%) (昨年ノ日本醫學會ニ報告セルモノ 16 例ニ 3 例ヲ加ヘ) ニ於テ結節性紅斑ヲ見タ。ソノ詳細ハ第 5 表ノ如クデアル。

第 5 表 結節性紅斑ヲ來セル患者

結節性紅斑	初 感 染	↑ 3 ♀ 12
	初感染→滲出性肋膜炎	↑ 2 ♀ 0
	初感染→肺 癆	↑ 1 ♀ 1
↑ 6 ♀ 13		

Malmros 及ビ Hedvall ハ女子ニノミ來ルト云ツテ居ルガ此ノ事モ絶對ノモノデハナイガ女子ニ於テハ男子ノ 2 倍屢々見ラレテ居ル。數ハ約 6%ノミデアルガ第 5 表ニ見ル如ク初感染ニ近キ結核患者ノミニ來ルモノデアル。之ニ反シ Scheel ハ「フリクテン」ヲ初感染者 229 名中 118 例ノ多數ニ見タト云フ。余等ノ見タル 30 名ノ「フリクテン」ハ第 6 表ノ如クデアル。

第 6 表 「フリクテン」ヲ伴ヘル患者

フリクテン	初感染 13	肺門腺腫脹	↑ 2 ♀ 4	
		肺門腺腫脹+肺門周圍浸潤	↑ 0 ♀ 4	
		雙極性初感染病竈	↑ 0 ♀ 1	
		初期浸潤	↑ 1 ♀ 1	
		早期型肺結核 3	血行性早期型	↑ 0 ♀ 2
			浸潤性早期型	↑ 1 ♀ 0
	晚期型肺結核 11		血行性晚期型	↑ 1 ♀ 4
		浸潤性晚期型	↑ 4 ♀ 2	
	石灰化アルモノ 3	浸潤性肺結核	↑ 1 ♀ 0	
		限局セル浸潤ノ吸收セル痕跡アルモノ	↑ 0 ♀ 1	
		右肺炎ニ半バ石灰化セルシモン氏竈アルモノ	↑ 0 ♀ 1	

即チ之ハ初感染ノモノニ來ルガ、半分ハ晚期ノ舊イモノニ來ル故、初感染ノ診斷ニハ用ヲ爲

サナイ。

次ニ精密ニ觀察セラレタ
結節性紅斑ノ1例ヲ示サ
ウ。

結節性紅斑例 O. S. 26 歳
醫師、昭和9年9月、赤
沈速度10耗、「ツベルク
リン」皮内反應陰性デア
ツタガ、半ヶ月後突然膝
關節附近デ脛骨前面ニ對
側性ニ鮮紅色ノ結節ヲ認
メタ。發疹ハ皮膚ヨリ僅
ニ隆起シ自發痛アリ、結
節ハ1週間後ニ消失シ
タ。「ツベルクリン」反應

25×25、X線像ニ兩側肺
門淋巴腺腫脹シテ居
タガ、2ヶ月後突然39.5度ノ發熱ヲ來シ、肋膜炎ト診斷セラレタノデア
ル。

(3) 初感染ノX線像

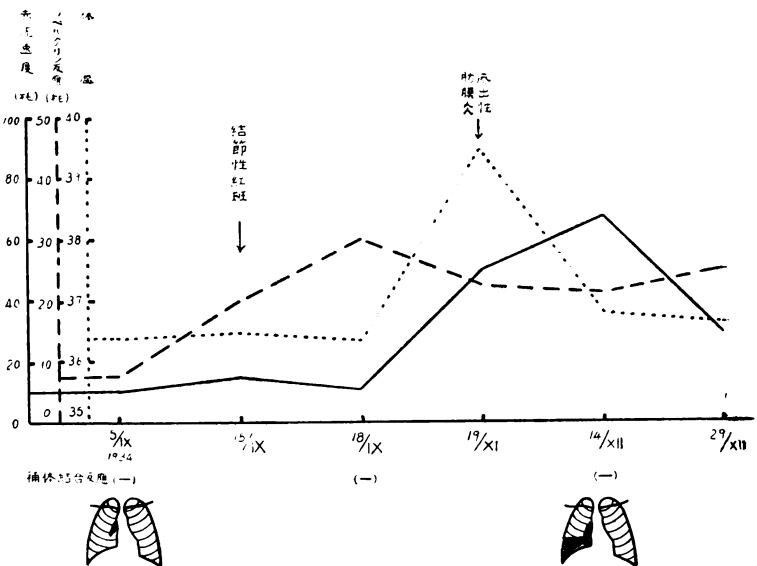
初感染ノ症狀トシテ重要デア
ルモノハX線像デア
ル。コノ像ヲ正シク讀ムニ最
モヨイ方法ハ感染以前ニ
撮影シタ寫眞ト比較スル
事デア
ル。初
感染ノ
時ノ寫
眞ニモ
全ク變
化ノナ
イ場合
が相當
屢タ
アル。

次ニ肺野ニツノ局限セル浸潤
アリ、之ニ對應
スル肺門
淋巴腺ノ
腫脹シテ
所謂雙極
性像又ハ
「ダンベル」
形像ヲ作
ツテ居ル
時ハ可ナ
リ特有デ
アル。此
ノ肺野ノ
浸潤ノミ
デ淋巴腺
ノ腫脹ガ
見エナイ
者、又ハ
淋巴腺腫
脹ノミノ
事等ガ
アル。又
肺門ノ周
圍ガ唯濁
スルニ過
ギナイ事
モアル。此
ノ點等ハ
感染前又
ハ治癒後
ノ寫眞ト
比較シテ
始メテ決
定シ得ル
場合ガ可
成リ多
イ。

(4) 初感染ニ於ケル赤沈速度

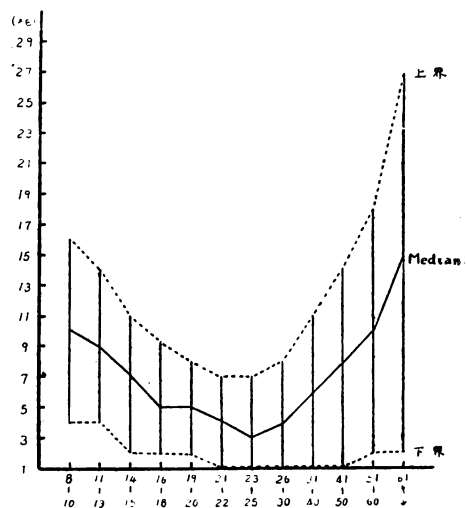
初感染症ヲ診斷スルニ最モ重要
ナ他覺的
症狀ノ一
ツハ赤沈
速度ノ促
進デア
ル。發熱
ノナイ場
合ニモ既
ニ促進シ
テキル。又
當初自覺
症狀ガ
アリ、赤
沈速度ニ
變化ノナ
イモノガ
「ツベル
クリン」
反應陽性
轉化ノ近
クニ急ニ
増加シ、
次デ漸次

第7表 岡 O 己 26 歳 ♂

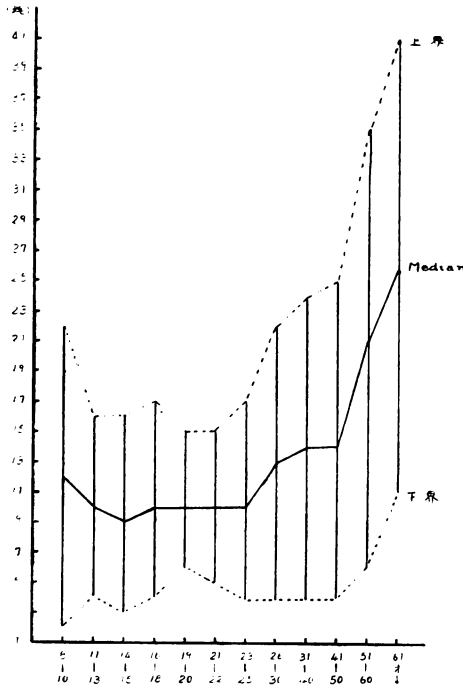


ニ又ハ急ニ正常ニ歸リ、又ハ長期間促進シテ居
タモノガ陽性轉化ト共ニ急ニ正常ニナル事モ
アル。若年者デ赤沈速度ノ促進ノ原因ヲナス慢性
扁桃腺炎、慢性腎盂炎、副鼻腔蓄膿症、妊娠等
ナクシテ微熱等ノ症狀アリ、赤沈速度ガ増加シ
テ居レバ初感染ヲ疑ツテヨイ。此ノ赤沈速度ニ

第8表 健康者ニ於ケル赤血球沈降速度(男子)
(Westergren 法、1時間値)



第 9 表 健康者ニ於ケル赤血球沈降速度(女子)
(Westergren 法, 1 時間値)

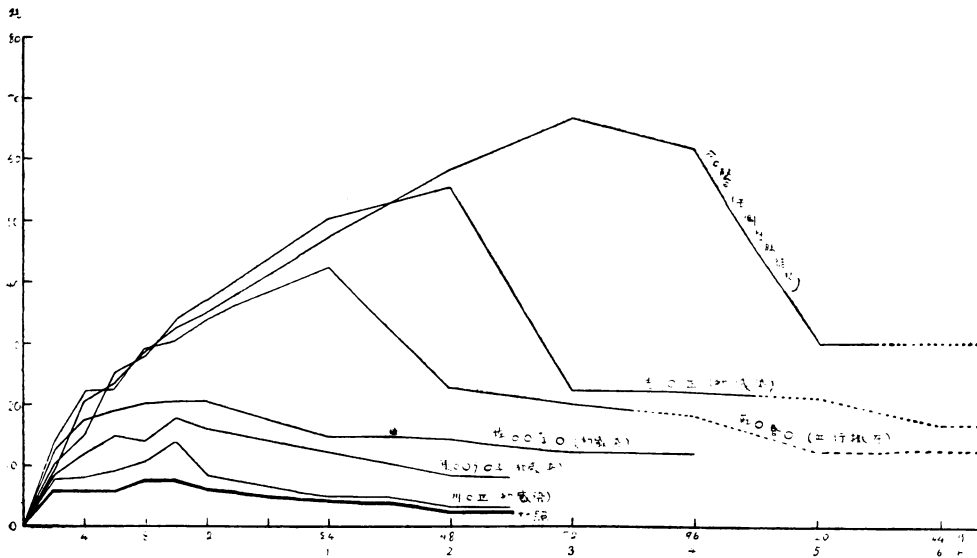


就テハ正常値が年齢ニヨツテ可成相違ガアル故
促進シテキルカ否カハ標準値ト比較シナケレバ
ナラナイ。之ハ 8, 9 表ニ依ルト便利デアル。

(5) 初感染ノ「ツベルクリン」反應

結染感染ヲ證明スルニ今日最モ確實トヒラレル
ノハ「ツベルクリン」反應陰性カラ陽性ニ轉化ス
ル事デアル。方法モ Pirquet 法カラ種々變遷
シテ皮内反應ニナツタ。最モ多ク用ヒラレルノ
ハ 100 倍、1000 倍ノ舊「ツベルクリン」ヲ皮内ニ
注射シテ其ノ後ニ來ル發赤、浸潤等ノ反應ヲ見
テ陰陽ヲ定メルモノデアル。余等ハ之ヲ基礎試
験トシテ 100 倍又ハ 1000 倍ノ舊「ツベルクリン」
溶液ヲ種々ノ患者ニ注射シテ 2 時間又ハ 3 時間
毎ニ發赤ヲ測定セシメテ次ノ如キ曲線ヲ得タ。
此ノ曲線ハ例外ハアルガ次ノ事ヲ示シテキル。
即チ初感染ノ初メ「アレルギー」ノ弱イ者程早く
發赤が起ツテ早く消失スル。時ニハ 12 時間位
ニテ消失スル事ガアル。然シ弱イモノハ大抵 48
時間以內ニ消失スル。之ヲ非特異性ノモノト見
ル人モアルガ對照ト比較シテ相違ガアリ、又次
第ニ強イ型ニ移行スル。強く反應スルモノハ時
間ト共ニ次第ニ強クナリ、48 時間ヲ頂點トスル
モノト 72 時間、又ハソレヨリ遅ク頂點ニ達ス

第 10 表 「ツベルクリン」皮内反應ノ時間的經過



ルモノトガアル。24 時間陰性デ 48 時間又ハ 72 時間後ニ陽性ニナツタモノハナイ。陰性ヨリ急ニ強陽性ニナル時ハ何時間後一見テモ大シタ影響ハナイガ弱ク轉化スル時ハ注意ヲ要スル。殊ニ「ツベルクリン」反應ハ轉化ヲ見ルノガ主眼ノ一デアル故 12 時間及ビ 24 時間後一見ルノヲ可トスル。尙弱クナツタリ強クナツタリスル變化ヲ見ルニ便利デアル事ガ一利點デアル。12 時間後ハ實際ニ當ルト夜中等ニナツテ觀察ガ困難デアルカラ余等ハ 1000 倍 0.1、24 時間ヲ以テ測ルヲ常トシテキル。尙陰性ナレバ 100 倍 0.1 ヲ試ミルガ此ノ成績判定ニ就テハ尙研究ヲ要スル事ト思フ。「ツベルクリン」反應ノ出現スル様子ハ極メテ徐々ニ弱ク轉化スルモノ、中等度ニ強ク轉化スルモノ、急ニ強ク轉化スルモノ等種々アルガ、一旦上昇シテ再ビ強クナル事、即チ週期性經過ヲトル時ハ「チフス」等ノ熱ノ曲線ト同ジデアル。唯後者ニ於テハ 12 ヶ月ニテ全經過ヲ終フルガ、前者ニ於テハ 4、5 年ヲ要スルノミ。結核感染ノ經過中ニ肋膜炎又ハ肺結核等ガ起レバ短時間ノ間弱クナルヲ常トスル。「ツベルクリン」反應ハ皆簡單ニ陰性ヨリ陽性ニ轉ジ、數

10 年變化ナク陽性ニ止マルト一般ニ信ゼラレテ居ルガ、ソノ様ニ單純ナモノデハナイ。臨牀上「ツベルクリン」反應ガ感染後陽性ニ轉化スル時期ハ古來 4 週間ヨリ 6 週乃至 8 週間ニ既ニ轉化スルト云ハレルガ實際患者ニ就テ見ルト、時ニハ數ヶ月或ハ數年ヲ要スル事ガアリ、又一旦陽性トナツタモノガ陰性トナリ、又陽性トナツタリ、又陰性トナリ切りニナル事ガアル。之ハ一般ニ稀有ト考ヘラレルガ余等ノ身邊到ル處ニアル。次ニ例ヲ示ス、

第 1 例

♀ 20—23 歳 女學生

昭和 7 年 12 月 2 日、全身倦怠感及ビ微熱ノ訴ヘテ當科外來ヲ訪レタ。營養ハ餘リ良好デナク、赤沈速度 55 耗、「ツベルクリン」皮内反應陰性、肺活量 2279 耗(—19%)テ、胸部レ線像ニ變化ヲ認メナカツタ。初感染症ノ疑ヒテ入院シタガ、依然 37.5—38.5 度ノ發熱ガアリ、「ツベルクリン」反應ハ陰性ヲ示シタ。入院後約 9 ヶ月ニテ「ツベルクリン」反應陽性(23 耗)ニ轉化シタ。胸部レ線像ニハ全ク變化ヲ認メズ、「ツベルクリン」皮内反應陽性轉化後 5 ヶ月頃ヨリ漸ク解熱シテ來タ。昭和 10 年 4 月ニモ「ツベルクリン」反應陽性デアツタ。詳細ハ次ニ表示スル。

第 11 表 2 ヶ年半ノ皮内反應並ニ赤沈速度ノ消長 1930 年滲出性肋膜炎

月 日	XI. 1932	I. 1933	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
皮内反應	0	2×2 8×9	8×11	8×11 5×5	7×8 6×7	6		5×6	5×6	6×8 23
赤沈速度	36	55	50 32	41 23	29	23		19	20 22	21 31
補結反應		(—)(±)	(+)	(—)(—)	(—)		(+)	(—)	(#)	(—)

月 日	X	XI	XII	I. 1934	II	III	IV	V	VI...VII.1935
皮内反應	15	22×30	22×30	30	25×30	41×50	40×33	6×5 12×15	14×13 9×9
赤沈速度		24	45	38	32	57	33	18 28 20 24	34
補結反應	(#)	(+)		(±)	(—)	(+)	(+)	(+)	(#)

第 2 例 ♀ 18—25 實驗補手

生來健康、昭和 7 年 5 月以來、當内科實驗補助トシテ勤務、當時赤沈速度正常、「ツベルクリン」反應陰性デアツタ。8 年 1 月ヨリ全身倦怠、微熱等ノ自覺症狀アリ、其ノ後赤沈速度著シク促進シ、20—78 耗ノ間ヲ動搖シ、昭和 9 年 1 月「ツベルクリン」反應陽性(15×

10 耗)ニ轉化シ、轉化後 11 ヶ月ニシテ左側胸痛アリ、試験穿刺ノ結果滲出液ヲ證明シ、赤沈速度 83 耗、「ツベルクリン」反應 12×13 耗デアツタ。昭和 11 年 5 月ニハ「ツベルクリン」反應再ビ陰性トナリ、同年 9 月初旬迄常ニ陰性ヲ持續シ、9 月末再ビ陽性(23×23 耗)ニ轉化シ、之ト共ニ全身倦怠、微熱等ノ症狀全ク消失

シタ。其ノ後昭和13年4月現在迄同程度ノ陽性ヲ示 スニ至ツタ。詳細ハ次ニ表示スル。
シテキル。左側肋膜炎後赤沈速度ハ漸次正常値ヲ示

第 12 表 7ヶ年間ノ皮内反應竝ニ赤沈速度ノ消長 ██████████ ♀ 18—25歳
左側肋膜炎

月 日	V. 1932	IX	I. 1933	V	I. 1934	V	IX	I. 1935	I. 1936	V
皮内反應	4×4	5×5	8×9	6×5	15×10	12×12	12×12	10×12	9×9	3×3
赤沈速度	21	20	78	18	34	15	83	30	14	20

月 日	IX	I. 1937	I. 1938	III. 1939
皮内反應	23×23	24×28	20×20	13×20
赤沈速度	23	7	36	16

昭和9年4月下旬ニハ陰性トナリ、更ニ昭和10年1月下旬ニハ陰性ナルモ、赤沈速度77耗ニ促進シ、胸部X線像ニ右肺下野ニ一過性ノ局限性浸潤ヲ認メタ、其ノ後依然「ツベルクリン」反應陰性、赤沈速度10—15耗、胸部X線像ニ異常ヲ認メナイ。

第 3 例 ██████████ 20—22歳 女學生

「ツベルクリン」反應ハ11月半ニ至リ弱陽性トナリ、其ノ後漸次強陽性トナツタガ、再ビ弱陽性トナリ、翌

第 13 表 3ヶ年間ノ皮内反應竝ニ赤沈速度ノ消長 ██████████ ♀ 20—22歳 女學生

月 日	1/V 1933	16/V	14/XI	6/II 1934	23/II	27/III	24/IV	30/IV 1935	30/I 1936	19/III
皮内反應	2×2	5×4	10×12	13×11	24×30	32×40	11×9	3×4	3×4	4×5
赤沈速度	14	17	7	65	18	13	10	20	77	13

月 日	27/IV
皮内反應	6×5
赤沈速度	15



第 4 例 ██████████ 20—26歳 學生

昭和7年8月初旬ヨリ全身倦怠及ビ微熱アリ、同月22日、赤沈速度11耗、「ツベルクリン」反應陰性、胸部

第 14 表 ██████████ ♂ 20—26歳 學生

検査月日	22/VIII '32	6/IX	15/IX	25/IX	4/X	13/X	20/X	5/XI ... 18/I 1933	25/V	
皮内反應	2	2×2	5	6×7	8×8	10×9	0	3×4	6	3
赤沈速度	11	12	27		9	13	11	16	4	7.5
補結反應	(-)	(-)	(-)					(-)		(-)

検査月日	VI	VII	19/VII	12/VIII	15/VIII	11/IX	11/X	19/X	11/XI	23/XII
皮内反應	3	4	3	3×4	2×3	1×2	2×3	2×3	20×30	25×25
赤沈速度	6	8.5	8	19	7	14	18	17	11	8
補結反應	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)

検査月日	14/I '34	28/III	3/V	13/IX	24/XI	5/III '35	27/IV	21/V	24/VI	22/VII
皮内反應	15×20	35×30	3	3	1×2	2×3	4	8×9	5×7	1×2
赤沈速度	9	11	7	3	4	3.5	5	10	32	9
補結反應	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)		(-)

検査月日	2/X	14/II '36	1/VI	10/VI	20/VII	28/VIII	12/X	8/I '37	28/I	13/IV	13/V	10/VI	2/VIII
皮内反應	1×2	0	2×3	0	0		0	0		1×2	0		0
赤沈速度	6	9	8	24	14	19	6	8	6	15	28	5	11
補結反應	(-)	(-)	(-)			(-)		(-)		(-)			

X線像ニ於テ左側鎖骨下部ニ局限性ノ浸潤ヲ認メタガ半月後ノ9月6日ニハ該浸潤ハ全ク消失シタ。其ノ後胸部X線像ニハ毎常異常ヲ認メナカツタガ「ツベルク

リン」反應ハ昭和8年11月20×30耗トナリ、昭和9年3月迄同程度ニ持續シ其ノ後陰性トナリ、今日モ尙陰性テ



アル。詳細ハ 14 表ニ示ス。

第 5 例 〇 19—23 歳 商

昭和 7 年 10 月 6 日當外來ヲ訪レタ。當時ノ主訴ハ 1 ヶ月來全身倦怠感アリ。約 10 日前朝 37.5 度、夕 38.5 度ノ發熱ガアツタト云フ。尙患者ハ疲レ易ク、肩凝、頭痛、咳嗽、喀痰、食慾不振等ヲ訴ヘタ。榮養佳良、肺ノ右側上部ニ僅少ノ囉音ヲ聽クモ、胸部 X 線像ハ全ク

正常テ、「ツベルクリン」反應ハ陰性デアツタ。其ノ後胸部 X 線像ニ著變ヲ認メザルモ、「ツベルクリン」反應ハ昭和 8 年 1 月弱陽性トナリ、同年 3 月ニハ再ビ陰性トナリ、11 月ニ至リ再ビ陽性トナリ、昭和 9 年ニハ殆ソド陽性、昭和 10 年 6 月ニ至リ再ビ陰性トナツタ。詳細ハ次表ニ示ス如クデアル。

第 15 表 4 ヶ年間ノ皮内反應ト赤沈速度ノ消長 〇 19—23 歳

検査月日	6/X '32	21/X	4/XI	17/XII	13/I '33	6/II	27/II	27/III	4/IV	21/VI	28/VII	22/VIII	29/XI	31/X
皮内反應	2	5	3×4		15×17	16×13		1×2	3×4	5×5	8×8	2×2	3×4	3×4
赤沈速度		22	20		19	20	15	13	14	12	5	6	20	11
補結反應	(-)	(-)		(-)				(-)	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	

検査月日	28/XI	10/I '35	22/II	26/IV	8/VI	17/VII	9/XI	3/VI '36
皮内反應	18×18		38×40	4×6	10×9	10×10		3×4
赤沈速度	11	7	8	20	15	9	7	12
補結反應			(-)	(-)				

第 6 例 〇 12—20 歳 學生

昭和 6 年 11 月、當時小學 5 年生、12 歳ノ本人ハ既ニ中學入學準備ノ豫習ガ始マツテ居タ所ニ野球ノ選手トナツテ大ニ得意テ練習シテ居タ。1 ヶ月經テ 12 月末ニナツタ頃元氣ナク歸宅シテハゴロゴロ 寢テ許リ居タ。檢温シテ見ルト體温 38 度 5 分アリ、赤沈速度 60 耗「ツベルクリン」皮内反應ハ〇×〇デアツタ。X 線像ハ唯肺門ノ邊ガ多少潤濁シテ居タ。10 日位テ下熱シタガ赤沈速度ハ中々正常ニハナラナカツタ。昭和 7 年

2 月ニナツテ赤沈速度 13 耗トナツタガ、「ツベルクリン」皮内反應ハ陽性ニナラズ 3 月末ニ至ツテ赤沈速度 9 耗トナリ、「ツベルクリン」皮内反應 10×10 トナツタ。7 月ニハ皮内反應ハ再ビ弱ク 5×5 トナリ、昭和 7 年 7 月ニモ尙 5×5、昭和 9 年 3 月ニ至リ 20×20 トナツタ。此ノ頃迄ニハ元氣モ餘リ優レナカツタガ此ノ時カラ非常ニ丈夫ニナツタ。昭和 10 年ニハ皮内反應又 7×7 トナリ、14 年 3 月ニハ 10×10 トナツタ。

第 16 表 8 年間ノ皮内反應ト赤沈速度トノ消長 〇 12—20 歳

検査月日	21/XII '31	7/I '32	23/I	13/II	23/III	2/IV	VII	30/X	24/XII	22/XII '33	21/III '34	22/VIII '35	15/III '39
皮内反應	0		0	0	10×10		5×5	5×5	5×5	5×5	20×20	7×7	10×10
赤沈速度	59	28	23	13	9	11	15	9	18	7	10	8	9

此ノ様ナ例ハ多クナイト考ヘル人モアルガ詳細ニ檢査スルト可ナリ多イモノデアル。文獻ニ於テモ「ツベルクリン」檢査ヲ詳細ニ行ツタ記録ヲ見レバ相當數ニ屢々記録サレテキルガ、之ニ就テ考察シ、如何ナルモノデアルカト説明シタモノハナイ。之ハ恐ラク非常ニ輕度ニ感染シタモノデアルト考ヘタ方ガ正當デアラウ。總テノ傳染病ニ於テ病原菌ガ體內ニ入ル時、其ノ儘健康ヲ少シモ害サナイ者カラ罹患シテ重症ニナル者トノ間ニ澤山ノ段階ガアル。結核病ニ就テモ斯クアルベキデアル。B. Lange ノ如ク常ニ最少量ノ結核菌テ發病スルトハ考ヘラレナイ。又最少量ニヨルト

スルモ身體ノ自然抵抗ガ種々アルベキデアルカラ結核菌ガ入ツテモ發病シナイモノ、又反應シテ「ツベルクリン」反應ヲ招來シテモ僅カノ間ニ結核菌ヲ死滅セシメ、又ハ體外ニ排泄セラレテ、「ツベルクリン」反應消失スルモノ等ガ澤山アルベキ筈デアル。結核病室ノ看護婦ナド 4、5 年經テ尙 5—10% 位「ツベルクリン」反應陰性ノモノガ殘ツテ居ルガ、細菌ガ入ラヌトハ考ヘラレナイ。入ツテモ「ツベルクリン」反應ヲ起ス程ニ傷害サレヌト考ヘルノガ妥當デアラウ。

第 1、2 例ニ肋膜炎ヲ起シテ後現ハレ「ツベルクリン」反應ガ時ニハ消失シ、第 3、第 4 例等テハ過性ノ浸潤

が現ハレテ、ツレニ一致シテ「ツベルクリン」反應ガ現ハレタ事ハ非特異性ノ浸潤テナクテ特異性ノモノデ完全ニ治癒シタト考ヘルノヲ至當トスル。

此ノ考ヘガ實際ニ妥當デアアル證據ニハ次ノ例ノ如キ輕度ノ感染ガ治癒シテ「ツベルクリン」反應モ消失シ、更ニ感染シ其ノ症狀ガ初感染症ノ時ト全ク同ジ例ガアルノデ明カデアアル。

第 1 例 再感染例 14—19歳 女學生 昭和 7 年 11 月、胸部 X 線像ニ右肺中野ニ限局性浸潤及ビ兩側肺門淋巴腺腫脹ヲ認メ、赤沈速度 17 耗、「ツベルクリン」反應陰性デアツタ。翌年 5 月ニハ胸部 X 線像ノ陰影ハ著シク吸收シタガ、赤沈速度 25 耗トナリ、「ツベルクリン」反應 14×14 ニ轉化シタ。其ノ後「ツベルクリン」反應ハ同年秋ニハ 13 耗、昭和 9 年春ニハ 7 耗トナリ、同年秋ニハ全ク零トナリ、實ニ 2 ヶ年後ノ昭和 12 年 3 月ノ検査ニ於テモ同様に陰性ヲ示シタ。然ルニ其ノ後 9 ヶ月ニシテ右側胸痛ヲ訴ヘテ外來ヲ訪レタ際ニハ赤沈速度 44 耗、「ツベルクリン」反應ハ再ビ陽性(25×25 耗)ヲ示シ、胸部 X 線像ニハ右側肋膜炎、左側肺門淋巴腺ノ著明ナ腫脹竝ニ左側肺上葉及ビ右肺尖部ニ斑點狀ニ廣イ陰影ヲ認メタ。

第 2 例 再感染例 12—16歳 小學生 昭和 9 年 3 月末、殊ニ夜間激シク咳嗽ヲ訴ヘテ當外來ヲ訪レタ。患者ハ榮養佳良、赤沈速度 24 耗、「ツベルクリン」反應 20×15 耗、補體結合反應(一)、胸部 X 線像ニ右肺中野ニ蠶豆大ノ浸潤ヲ認メタ。其ノ後赤沈速度ハ 5 月初旬 86 耗、中旬ニハ 58 耗、下旬ニハ 20 耗トナリ、6 月ニハ 10 耗トナツタ。翌年 4 月ニハ X 線像陰影ハ殆ンド吸收シ、「ツベルクリン」反應モ陰性トナツタ。然ルニ同年 11 月初旬ニ至リ再ビ弱陽性トナリ、更ニ 12 月ニハ陰性トナリ、昭和 13 年 3 月中旬 38 度ノ發熱ト共ニ赤沈速度 54 耗ニ促進シ「ツベルクリン」反應 35×48 耗トナリ、胸部 X 線像ニハ左肺門淋巴腺ノ著明ナ腫脹ヲ來シタ。

共ニ第一次ノ感染ニヨリ出來タ初感染竈ガ石灰化シテ居ル。斯ノ如キモノハ世人ノ考ヘル如ク例外的ノモノテナク恐ラク相當數ニ見ラレルデアラウ。

我等ガ種々ノ團體ニ於テ數年連續シテ集團検査ヲ行ツタ處皆全員ノ 5—15% 位ニ斯ノ如キモノガ見出サレタ。

(Ⅲ) 團體ニ於ケル初感染症發生狀況

小學校ヲ卒ヘテ社會特ニ都會ニテ團體生活ニ入ル時ハ急速ニ結核菌ノ洗禮ヲ受ケルガ今三團體ニ於ケル初感染症發病ノ狀況ヲ示サウ。宮城縣男子師範生徒、東北帝國大學醫學部附屬醫院看護婦生徒及ビ第一高等女學校生徒ニ於ケル検査ニテハ、感染ハ看護婦生徒最モ多ク 52%、發病モ 50% デ大デアアルガ、師範生徒ニ於テハ 10 年前ハ感染ハ頗ル多カツタガ早期診療ノ結果非常ニ少ナクナツタガ、發病ハ依然トシテ 50% ニ近ク甚ダ大デアアル。之ハ共ニ衛生狀態ガ惡イ爲デアラウ。女學校生徒ニ於テハ感染ハ二者ノ中間ニアルガ發病ハ 26% 即チ兩者ノ半分デアアル。之ニ依テ發病ト感染トハ別個ニ考ヘル必要ガアル事ガ判ル。茲ニ面白い事ハ看護婦ニ於テハ肋膜炎ヨリ肺癆ヘ移行スル事ガ多イノニ反シ、女學校生徒ニ於テハソレガ少ナイ事デアアル。之ニ依テ肋膜炎ハ適當ノ條件ノ下ニハ却テ肺結核ニナルノヲ防止スルガ如キ觀ヲ呈スル。コノ事ニ就テハ後ニ述ベル。

第 17 表 東北帝國大學醫學部附屬醫院看護婦生徒 50 名ニ於ケルケ 4 年間ノ繼續検査(1935 年入學)

入學後感染セルモノ 26 名 (52.0%) 中初感染症ヨリ更ニ遂展セルモノ	肋膜炎 8 → 肺尖轉移 5	肺尖轉移 → 肺癆 2 → 肺癆 1
	計 13 (50.1%)	3 (11.5%)
入學時既感染者 9 名 (18.0%) 中發病セルモノ	雙極性初感染竈様ノ X 線像所見ヲ呈セルモノ 1 (11.1%)	

未感染ニ終始セルモノ 3 名 }
入學時既ニ發病シ居レルモノ 6 名 } ヲ除ク
皮内反應陰陽ノ間ヲ動搖セルモノ 6 名 }

第 18 表 宮城縣男子師範學校生徒 75 名ニ於ケル 4 ヶ年間ノ繼續検査(1934, 1935 年入學)

入學後感染セルモノ 10 名 (13.3%) 中初感染症ヨリ更ニ遂展セルモノ	肋膜炎 1 浸潤性早期型 4
	計 5 (50.0%)
入學時既感染者 22 名 (29.3%) 中發病セルモノ	肺尖轉移 1 (4.5%)

未感染ニ終始セルモノ 42 名 }
入學時既ニ發病シ居レルモノ 1 名 } ヲ除ク

第 19 表 宮城縣立第一高等女學校生徒 225 名ニ於ケル4ケ年間ノ繼續検査(1935 年入學)

入學後感染セルモノ34名(15.1%)中 初感染症ヨリ更ニ遂展セルモノ	肋膜炎 5 → 肺尖轉移 1	
	肋膜炎 1 → 肺癆 1	
	多發性漿液膜炎 1 → 肺癆 1	
	浸潤性早期型 1	
	肺癆 2 → 肺癆 2	
計 10 (26.3%)		4 (10.5%)
入學時既感染者 60 名(26.7%)中發 病セルモノ	肋膜炎 1	
	肺尖轉移 2 → 肺癆 1	
	再燃性肺尖結核 1	
	早期浸潤(?) 1	
	肺癆 1 → 肺癆 1	
計 6 (10.0%)		2 (3.3%)

未感染ニ終始セルモノ 115 }
 入學時既ニ發病シ居レルモノ 5 }ヲ除ク
 皮内反應陰陽ノ間ヲ動搖セルモノ 11 }

(IV) 初感染ニ續發スル滲出性肋膜炎ソノ後ニ
 來ル肺結核ニ就テ

初感染ニ滲出性肋膜炎ガ續發スル事及ビ滲出性
 肋膜炎ノ大多數ガ初感染ニ屬スル所ナル事ハ周
 知ノ事デアアルガ、初感染ト診斷サレル者ノ中何
 程ノ人員ニ肋膜炎ヲ起スカト云フニ其ノ5分ノ
 1位ハ必ズ肋膜炎ヲ起ス。入院セシメ安靜ヲ守
 ラシメテモ屢々起ス。若シ胸廓内ノ淋巴腺大イ
 ニ腫脹シテ居リ、又ハ初感染浸潤大ニ擴ガツテ
 居リ赤沈速度大ニ促進シテ居レバ半年位ノ間
 ニ、時ニハ1年後ニ肋膜炎ヲ殆ド100%ニ起ス。
 然ラザレバ肺癆ニ移行スル可能性ガ多イ。茲ニ
 初診時初感染症ト診斷セラレ其ノ後ノ經過中肋
 膜炎ヲ發生シタモノヲ表示スル。

第 20 表 初診時初感染症ト診斷シ其後ノ
 經過中肋膜炎ヲ發生セルモノ

	初感染症	肋膜炎ヲ起セルモノ	「ツベルクリン」反應陰性時肋膜炎ヲ起セルモノ
入院患者	120	33 (27.5%)	6 (5.0%)
外來患者	165	22 (13.3%)	13 (7.9%)
合計	285	55 (19.3%)	19 (6.7%)

滲出性肋膜炎患者ガ肋膜炎治癒後10年間位ノ
 間ニ其ノ3分ノ1又ハ半数ハ肺結核トナリテ死

亡スル事ハ一般ニ信ゼラレテ居ル事實デアアル。
 左ニ二、三ノ報告ト余等自身ノ經驗トヲ示ス。

第 21 表 濕性肋膜炎ノ死亡率(諸家ノ報告)

報告年度	著者及所屬	觀察期間	患者數	死亡者數	死亡率
1920	今井(海軍)	1—11ケ年	152	52	34.2
1926	出井(陸軍)	4—11	4183	1085	25.9
1935	古瀬(大里内科)	1—10	191	69	36.1
1938	熊谷内科	1—11	633	88	13.9
		4—10	311	65	20.9

第 22 表 濕性肋膜炎ノ遠隔成績
 昭和 12 年 12 月調査

年度	觀察期間	總計	全快	快方	不變	他臟器結核	惡化	死亡	死亡率
昭和2年	10ケ年	54	30	5	0	0	0	19	35.2
3年	9	43	32	2	0	2	0	7	16.3
4年	8	41	29	4	0	2	0	6	14.6
5年	7	33	23	1	0	2	0	7	21.2
6年	6	28	15	1	0	0	1	11	39.3
7年	5	43	28	5	0	2	0	8	18.6
8年	4	69	54	3	0	4	1	7	10.1
9年	3	75	45	13	1	3	5	8	10.7
10年	2	81	52	17	5	0	3	4	4.9
11年	1	91	47	29	3	3	2	7	7.7
12年	1年未滿	75	20	27	18	2	4	4	5.3
總數		630	375	107	27	20	16	88	13.9
%			59.2	16.9	4.3	3.2	2.5	13.9	

尙後ニ詳シク述ベルガ初感染症ト診断セラレ、患者ニ於テ喀痰中ニ半數位ニ少數ノ結核菌ガ培養ニヨツテ證明セラレル初感染ニ屬スル肋膜炎ニ於テモ亦屢々證明スル事ガ出來ル。

今初感染ニ接續シテ來タ滲出性肋膜炎ニテ喀痰培養ヲ行ヒタル 50 例ノ陽性者及ビ陰性者ノ運命ト其ノ X 線像所見トヲ表示スルコト、スル。

第 23 表 滲出性肋膜炎患者ノ喀痰ノ結核菌培養成績ト「レントゲン」所見及ビ豫後トノ關係 (検査人員 50 名)

培 養 陽 性	肺門及其ノ周圍溷濁セルモノ	3	→心 囊 炎	1
	肺門淋巴腺腫脹セルモノ	2	→肺尖轉移 →氣管撒布	1
	淋巴腺腫脹及初感染病竈アルモノ	1	→初感染竈擴大→吸收	1
	以上ノ他ニ氣管播種肺尖轉移等アルモノ	8	→氣管播種 →肺尖轉移及其他ノ部位ノ播種 →肺尖轉移→2年後肺結核	1 1 1
	計	17 (34.0%)		7
培 養 陰 性	肺門及ビ其ノ周圍溷濁セルモノ	11		
	肺門淋巴腺腫脹アルモノ	15	→浸潤出現→吸收 (喀痰缺窠便培養) 1 →肺尖轉移 (喀痰缺窠便培養) 1	
	淋巴腺腫脹及初感染病竈アルモノ	5		
	以上ノ他ニ氣管播種肺尖轉移等アルモノ	2		
	計	33 (66.0%)		2
總 計	50			9

菌陽性者ハ將來肺結核及ビ肺尖轉移其他ノ播種等ヲ來シタガ陰性者カラハ 1 名ニ於テ浸潤出現シ、又 1 名ニ於テ肺尖轉移ヲ來シタノミデア。之ハ喀痰喀出ナキ患者ヲ糞便培養シテ陰性ナモノデア。カラ、コノ鋭敏サハ喀痰培養ヨリ遙ニ少ナイカラ之ハ少量ノ菌ヲ排出シテ居タカモ知レナイ。此ノ研究ハ僅カ 3 年許リノモノデア。カラ詳細ナ遠隔成績ハ尙研究ノ上後日ニ讓ルガ前述ノ遠隔成績ニ於ケル肋膜炎患者ガ後ニ 20—30% ニ於テ肺結核ヲ起シテ死亡スル數ト培養陽性率ト大體ニ於テ一致スル事ガ面白イ事一思ハレル。

(V) 初感染ニ於ケル結核菌ノ證明

初感染ノ様ナ早イ時期又ハ肺ニ變化ノ少ナイ時期ニ喀痰ニ結核菌ヲ證明シタモノガアルカト云フニ、獨逸デ唯小兒科醫 Opitz ト云フ人ガ 1937 年 3 例ノ 7 ヶ月ヨリ 6 歳迄ノ小兒ニ於テ動物試

驗又ハ培養ニテ證明シタノ報告ガアル。其ノ報告サレタ病歴ヲ見ルト可ナリ進行シタモノデア。其ノ他ニ初感染ト云フ事ヲ目標ニシテ研究シタ人ハナイ。佛國ノ Cordier, Bezançon 等ガ肺ニ X 線上所見ナキ又ハ所見ノ極メテ少キ患者デ結核菌ヲ證明スルモノガアリ、之ヲ Porteurs valides, Porteurs sains トカ Formes Pancibacillaires トカ云フ名デ報告シテ居ルガ多クハ肺結核ノ治癒シタ後ノ肺氣腫又ハ慢性氣管枝炎等ト考ヘテ初感染ノモノガアルトハ考ヘテ居ラナイ様デア。

初メ余等ハ流血中カラ結核菌ヲ培養シテ結核感染ノ極初期時ニ「ツベルクリン」反應尙陰性ノ時代ニモ流血中ヨリ證明セラレルノヲ見タ。第 24 表ニソノ成績ヲ示ス。

即チ極メテ初期ニ淋巴腺ニ限局シテ居ル時代ニ既ニ證明セラレ滲出性肋膜炎ガ出現スル時ハ證

第 24 表 結核性症患者ノ流血中結核菌 (1935 年)

	診 斷	検査數	陽性數	陽性率	
流 血 中	初感染(肺門周圍炎又ハ正常X線像)	41	6	14.6	
	血 行 撒 布	83	24	28.9	
	肋 膜 炎	132	0	0	
	肋 腹 膜 炎	50	8	16.0	
	浸潤性早期型	91	0	0	
	輕症及中等度重症肺結核	338	0	0	
	結 核 菌	重症肺結核	56	15	26.8
		結核性腦膜炎	2	2	100.0
		泌尿器結核	20	5	25.0
		關節結核	9	1	11.0
頸部及腋窩淋巴腺炎		10	1	10.0	
	總 數	832	62	7.45	
屍 體 血 中 結 核 菌	重症肺結核	8	6		
	結核性腦膜炎	4	2		
	肋 腹 膜 炎	3	3		
	血 行 撒 布 症	2	2		
	總 數	17	13	76.5	

明シ難クナリ、肺結核ノ末期ニ又流血中ニ出現スルノヲ見テ、此ノ方法ヲ改良スレバ實地ニ應用出來ルト考ヘテ種々改良ヲ加ヘテ居ルガ未ダ實用ニ至ラナイ。コ、デ菌血症アレバ菌尿症アルベシト考ヘ、之ヲモ追求シタ。腎結核ナキ時モ尿中ニ結核菌ノ出現スル事殊ニ初感染ニモ可ナリ屢々出現スル事が判ツタガ、之モ未ダ實用

第 25 表 初感染期ニ於ケル流血、尿及ビ咯痰中結核菌分離培養成績

材 料	検査人員	X 線 像	陽性數%
流 血 中 (熊谷・飯淵・小川)	41	所見ナキカ又ハ唯肺門潤濁スルモ	6 14.6
		ノ 氣管及氣管枝淋 巴腺腫脹	
尿 中 (佐 藤)	25	肺門淋巴腺腫脹	8 32.0
		變化ナン	
咯 痰 中 (片倉・岡)	19	初感染浸潤	5 26.3
		肺門淋巴腺腫脹	
		所見ナン	
咯 痰 中 (岡・田村)	31	初感染浸潤	13 41.9
		肺門淋巴腺腫脹	
		肺門周圍炎	
		變化ナン「ツベ ルクリン」反應	
		陽性轉化者	

迄ニ至ラナイ。

然ルニ道ハ近クニアリ、初感染患者喀痰中ニ結核菌ノ存在ガ培養法ニヨリテ容易ニ明カニサレル事が判ツタ。次第ニ成績モ確實トナリ、實地ニ應用スル事が出來ルト云フ確信ガ出來タ。次ニ表ニテ示ス。

第 26 表 咯痰中結核菌培養セル當内科外來及入院初感染症患者 (自昭和 11 年至同 13 年)總數 49 名ニ於ケル成績

X線像ニヨル分類	例 數	陽性數及%
變化ナキモノ	3	0
淋巴腺腫脹	12	3
雙極性初感染竈	19	12
淋巴腺腫脹及周圍炎	15	9
合 計	49	24(48.97%)

初メハ尿ヨリノ成績ノ方が優レタ如キ觀ヲ呈シタガ、次第ニ咯痰培養ガ成績佳良トナツタ。ソノ方法ハ極メテ簡單デアル。

検査方法ハ早朝咳嗽ト共ニ喀出セラレタ喀痰ヲ豫メ交附シ置イタ滅菌「シャーレ」ニ採取セシメ、先ヅ塗抹標本ヲ染色檢鏡シ、次ニソノ 2 cc ヲ 4% 硫酸 15cc 中ニテ攪拌細碎シ、後遠心シテ沈渣ヲ第一及ビ第二磷酸鹽一味ノ素一鶏卵培地ニ塗抹シ孵竈ニ入レ、肉眼的ニ聚落ヲ見レバ其ノ抗酸性及ビ毒力ヲ檢シタ沈渣ヲ 3 本ノ培地ニ植エテ全培地ノ聚落 5 アレバ 1/3 ノ如ク記述スル。塗抹標本ニテ極メテ少數ニ證明シ得ル如キモノデ培養スレバ尙無數ニ聚落ヲ得、1 本ニ 100—150 位ノ聚落ヲ得ルモノヨリ塗抹標本ニテ證明シ得ル限界デアル。此ノ培地ノ製法ハ簡單ニ且頗ル廉價デアル。次ニ其ノ製法ヲ示ス。

1. 原液

- 第一磷酸加里 5.0
- 第二磷酸曹達 5.0
- 味ノ素 10.0
- 蒸溜水 100.0

100 度ニ 30 分煮沸滅菌

2. 原液

- 原液 100.0
- 「グリスリン」 6.0cc
- 2%「マリヒットグリーン」 6 cc

卵液(全卵) 200.0cc
分注第1日85度40分、第2日80度40分、
第3日80度40分滅菌。

外來及ビ入院初感染患者49例ニ於ケル培養成
績及其ノ菌陽性者ト菌陰性者ノ運命ハ次ノ表ニ
示ス。

第 27 表 當内科外來及入院(自昭和11年至13年)初感染症患者總數49例ニ於ケル
喀痰培養成績ト豫後トノ關係

陽 性 者 ノ 運 命		陰 性 者 ノ 運 命
24	→肋膜炎 7→ →肺尖轉移 3 →肺癆後燃 2 →吸收後燃 2 肺癆 1 腹膜炎 1 死亡 2	25 →肋膜炎 5 →肋膜炎 1
危険ナル状態ヲ呈セルモノ	17(中肺癆6 25%)	6
簡單ニ治癒セルモノ	1	15
人工氣胸ニヨリ治癒セルモノ	1	0
短期觀察者	5	3
入 院 中	0	1
計	7	19

即チ全體トシテ49例中24例即チ48.9%ニ陽性
デアリ、後者カラ肺癆6例ヲ出シ、中2例ハ死
亡シテ居ルガ陰性者カラハ1例ヲモ出シテ居ラ
ナイ。

肋膜炎ハ菌培養陽性及ビ陰性兩群ヨリ夫々7例
及ビ5例ヲ出シテ居リ、喀痰ニ於ケル菌ノ存在
ハ肋膜炎ノ發生ニハ關係ガナイ事ガ判ル。

茲ニ於テ此ノ培養法ニ依ル喀痰検査ヲ一團體ニ
行ツテ見タ。此ノ學校生徒ハ毎年2回普通X線
像検査、「ツベルクリン」反應、赤沈速度測定等
ヲ行ツテ開放性ノ結核患者ヲ隔離シテ居ルノデ
開放性ノ患者ノ無イ筈ノ團體デアル。此ノ294
例ニ就キ1年間ニ互リ4回ノ喀痰培養ヲ行ツ
タ。此ノ成績ハ28表ノ如ク21例ノ培養陽性者
ヲ得タ。

此ノ培養成績ト「ツベルクリン」皮内反應トノ關
係ヲ見ルニ294例中「ツベルクリン」反應ガ終始
陰性デアツタ136例カラハ1例モ陽性者ガナ
イ。「ツベルクリン」反應ガ陰性カラ陽性ニ轉化
シタ19例中7例ニ結核菌培養陽性者ガアル。此
X線像ヲ見ルニ初感染浸潤2、肺門淋巴腺腫脹
2、肺門周圍炎2、X線像正常ノモノ1デア
ル。初メヨリ「ツベルクリン」反應陽性ナル138
例中ハ14例ノ菌陽性者ガアツタ。其ノX線像ハ肺

第 28 表 宮城縣男子師範學校ニ於ケル
喀痰中結核菌培養成績

検査人員	ツベルクリン皮内反應	培養陽性者	X線像	菌陽性者
293	(-) 136	0		
	(+) 138	14 (10.1%)	所見ナキモノ 116 肺門淋巴腺腫脹 6 初感染浸潤 6 肺尖結核 7 再燃性浸潤 3	1例 4 3 3 3
	(-) 19 (+) 19	7 36.8%	所見ナキモノ 13 肺門淋巴腺腫脹 2 肺門周圍炎 2 初感染浸潤 2	1 2 2 2

門淋巴腺腫脹4、初感染浸潤3、肺尖結核3及
ビ再燃浸潤3デアリ、此ノ中肺門淋巴腺腫脹4
及ビ初感染浸潤3ハ初感染症ニ入ルベキモノデ
アル。之ニ「ツベルクリ」陽性者19例中7例即
チ36.8%トナル。而シテ陽轉者中X線像ニ變化
ノアツタ6例ハ皆菌培養陽性デアル事ハ大ニ注
目ニ値スル。尙コノ中多數ノ聚落ヲ示シタ3例
中2例ハ後肺癆ニナリ、1例ハ肋膜炎ニ移行シ
タ。

之ニ依レバ喀痰中ノ結核菌培養ハ初感染ノ診断
及ビ其ノ豫後ヲ知ル最良ノ方法デアル事ガ判
ル。勿論之ハ尙方法ノ改良特ニ材料採取ヲ確實
ニスル事ヲ要スルハ勿論デアル。

(VI) 初感染ヨリ肺結核ヘノ遂展

第 29 表 宮城縣男子師範學校ニ於ケル喀痰培養成績(検査人員 293 名)
(初感染者中培養陽性者 15 名ニ於ケル培養陽性回数並ニ聚落數ト發病トノ關係)

診 斷	例 數	培 養 陽 性 回 數				聚 落 數				經 過
		1 回	2 回	3 回	4 回	(+)	(++)	(+++)	(####)	
「レントゲン」像變化ナキモノ	2	2	0	0	0	2	0	0	0	0
初感染浸潤症	5	3	2	0	0	1	1	1(1)	2(2)	3 肺結核 1 死亡
肺門淋巴腺腫脹	6	3	3	0	0	5	0	0	1(1)	1 肋膜炎
肺門周圍炎	2	1	1	0	0	2	0	0	0	0
計	15	9	6	0	0	10	1	1	3	4

(+) 1—15 (++) 16—35 (+++) 36—100 (####) 100→ 括弧内ハ發病數

肺結核ノ遂展ニ關シテ本講演ノ冒頭ニ既ニ述ベタル如ク結核菌ニ感染セラレ、一旦治癒シテ「アレルギー」ヲ得タ者が、第二次ノ内的又ハ外的感染ヲ主トシテ肺尖ニ受ケ、此處ヨリ始まり、相當長年月ヲ要シテ次第ニ下方ニ擴ガリ肺結核ニナルト説ク所ノ所謂舊派ト、此ノ第二次感染ハ主ニ鎖骨下ニ來リ、早期浸潤ヲ生ジ、之ガ軟化崩解シ、之ヨリ氣管播種ニヨリ急激ニ肺癆ニ移行スルト唱道スル所謂新派トガアル。此ノ新派ノ Braeuning, Redeker 等及ビ其ノ他歐洲ノ大多數ノ學者ハ早期浸潤ヨリ出發スルモノ以外ニ初感染ニ引續キ起ル所謂 Ranke ノ全身傳播期ニ起ル血行撒布ガ一旦治癒シ、其ノ跡ニ殘ス癍痕ヨリ再燃シテ浸潤ヲ來シ、之ガ出發點トナリテ肺癆トナル。肋膜炎ノ後ニ來ル肺結核ノ如キモノハ此ノ定型的ナモノデアル。初感染ヨリ直接肺癆ヲ起スモノハ寧ロ小兒等ニ例外的ニノミ見ラレルト云ツテ居ル。近頃 Malmros 及ビ Hedvall ハ 151 例ノ初感染者ニ於テ 47 例ニ結核性變化ヲ見、其ノ中 14 例ニ肺癆ニ移行スルヲ見タ。此ノ時ニ肺尖即チ鎖骨上又ハ第一肋間ニ多數ノ小ナル軟キ陰影ヲ生ジ、之ガ出發點トナリテ肺癆ニ進展シ來ルト、之ヲ Subprimärer Herd (亞初期感染竈)ト名付ケタ、之ハ血行性ニ生ズルカドウカ分ラナイト云ツテ居ル。既ニ述ベタル如ク、初感染症患者ニハ喀痰中ニ屢々結核菌ガ出現シ、此ノ證明セラレル者が、後ニ肺癆ニナルノヲ見レバ、此ノ初感染竈ヨリ氣管中ニ排出サレル結核菌ガ、肺ノ他ノ健

康ナ場所ニ新シキ病竈ヲツクリ、次ニ所謂管内性ニ擴ガリ、遂ニ肺癆ヲ生ズルト考ヘルノハ最モ無理ガナイト思ハレル。

我國ノ肺結核ノ動キハ一般的ニ云ヘバ歐米ノ記載ヨリ其ノ「テンボ」ガ餘程迅速ノ様デアル。患者ニハ不幸デアルガコノ「テンボ」ノ迅速ナル事ハ余等ニトツテ肺結核ノ遂展スル有様ヲ研究スルニ、最モ便利デアル。今此ノ雙極性ヲ示ス病竈ノ初感染浸潤又ハ淋巴腺腫ヨリ發生スル肺結核ヲソノ遂展スル方法ニ依リテ大別スルニ、

(1) 初感染浸潤自身ガ直接ニ浸潤性ニ擴大スルモノ

Malmros 等ハ初感染竈ヨリ直接ニ肺癆ガ出來ル事ハ非常ニ稀有デ、唯 1 例ヲ經驗シターズギナイト云ツテ居ルガ、余等ハ之ヲ多數經驗シテ居ル。次ニ實例ヲ以テ示スコト、スル。

第 1 例 [] 13—18 歳

1934 年 4 月、微熱ノ症狀アリ、赤沈 1 時間 62 耗、レ線像右側肺門ノ淋巴腺多少腫脹シテ居ル。同年 10 月ニ至リ右側滲出性胸膜炎ヲ起シタ。之ヲ穿刺、滲出液ヲ排出シ、此ノ滲出液カラ結核菌ヲ培養シタ後 11 月 15 日、レ線寫眞ヲ撮影シタ。之ニヨルト右肺下野ニ小ナル浸潤ト淋巴腺ト雙極性トナツテ居ル。「ツベルクリン」反應 20×20 耗、赤沈速度 57 耗、安靜臥牀ノ結果下熱シ赤沈速度モ少クナツテ來タガ、1935 年 6 月ニ初潮出現スルト共ニ初感染浸潤モ擴大シ、多少ノ發熱ヲ來シ、赤沈速度モ多クナツタ。「ツベルクリン」反應 25×20 耗赤沈速度 70 耗氣胸ニヨリ一時輕快スル如ク見エタガ 1936 年 1 月ニハ喀痰中結核菌培養陽性トナリ、爾來ニ進一退、喀痰培養ハ或ハ陰性トナ

リ或ハ陽性トナリ、1936年10月ニハ一時喀痰ニ塗抹標本ニテ菌陽性トナツタ。又浸潤モ擴ガリ小軟化モ現ハレタ。赤沈速度10耗結核菌(卅)。其ノ後一進一退病竈ハ或ハ擴大或ハ縮小シタガ、1938年6月ニハ微量ノ喀血ヲシタ。浸潤モ少シク擴大シテ小軟化竈モ現ハレタ。「ツベルクリン」反應45×50耗喀痰中結核菌少數、赤沈速度38耗、此ノ有様テ今日迄續イテ居ル。中途ニ此ノ患者ノ如キヲ見レバ此ノ浸潤ハ何ヨリ來ルカ不明デアアルガ初ヨリノ經過ヲ見レバ此ノ浸潤自身初感染竈ナル事ハ一目瞭然デアアル。次ノ如キモノモ同様ノ經過ヲトツタモノデアアル。

第2例 學生 23—30歳

1930年11月22日ノX線像ヲ見ルト右側ノ副氣管淋巴腺腫脹シ居ル外殆ド正常ナルモ、1931年ノX線寫眞ハ右側下肺野ニ粟大浸潤ガアリ、其ノ中央カ軟化シテ居ル。赤沈速度30耗、皮内反應20×20耗。ソノ後浸潤ハ全ク吸收シテ痕跡ハナクナツタガ、1934年少量ノ喀血アリ、浸潤出現シタガ、後吸收シ、1938年2回喀血シタメ來訪シタ。「ツベルクリン」反應23×20耗、赤沈速度21耗、病竈ハ少シク擴大シテ二、三ノ軟化ガ現ハレテ居ル。喀痰培養陽性デアツタガ氣胸ニ依リテ吸收シ、6月20日、赤沈速度8耗「ツベルクリン」反應90×70耗トナリ浸潤モ吸收シテ見ラレナイ。

(2) 肺門淋巴腺ヨリ直接周圍ニ接續シテ擴大シテ來ルモノ

第1例 19—21歳 農家ノ娘

1937年3月初旬、感冒ニ冒サレ背、胸部ニ鈍痛アリ、ソレヨリ時ニハ盜汗、咳嗽、全身倦怠、不眠、下痢及ビ微熱アリ、4月6日ニ入院シタ。3月27日「ツベルクリン」皮内反應45×20耗、赤沈速度108耗、レ線寫眞左ニ副氣管淋巴腺カ半圓形ニ腫脹シテ居ル。11月14日「ツベルクリン」皮内反應35×40耗、赤沈速度35耗、副氣管淋巴腺カ下部左方ニ向ツテ肺野中ニ浸入シテ來タ。翌年6月ノレ線寫眞ニ陰影ハ一層擴大シテ居リ喀痰培養ハ陽性トナツタ。1938年10月9日ニハ「ツベルクリン」皮内反應25×22耗、赤沈速度65耗、レ線寫眞ノ陰影ハ一層擴大シテ左側胸廓縁ニ達シテ居ル。喀痰中僅カニ塗抹標本テ結核菌ヲ見出ス事ガ出來ル。此處ニ於テ人工氣胸ヲシタ所、浸潤ハ吸收シテ硬化性ノモノトナリ、淋巴腺モ小トナリ1939年6月5日赤沈速度26耗、「ツベルクリン」皮内反應37×

35耗トナツタ。喀痰中ノ結核菌ハ唯時々培養ニテ證明出來ルノミデアアル。

斯クノ如ク左側ノ副氣管淋巴腺ノ腫脹ヨリ次第ニ肺ニ進行スルモノハ屢々見ル所デアアル。然シ此ノ如キ場合、果シテ淋巴腺自身カラ淋巴道ニヨリテ接續シテ來タモノカ、又ハ其ノ近クニアル肺内ノ初感染竈ヨリ擴大シタモノカ不明デアアルガ、何レニシテモ初感染ニ屬スルモノデアアル事ハ確カデアアル。次ノ例ノ如キハ之ヲ如實ニ示シテ居ル。

第2例 14—19歳 女學生

昭和7年4月、某女學校ニ入學シタ。當時赤沈速度10耗、「ツベルクリン」反應陰性デ、胸部レ線像モ全ク正常デアツタ。

昭和9年4月、感冒ニ罹リ其ノ後約1ヶ月下痢、腹部壓迫感、喀痰アリトテ外來ヲ訪レタ。患者ハ榮養不良デ、赤沈速度33耗、「ツベルクリン」反應陽性ニ轉化シ30×35耗ヲ示シ、胸部レ線像ニ於テ左肺中野ニ榛實大ノ陰影アリ、肺門淋巴腺ハ著明ニ腫脹シテ居タ。7月中旬ニハ左肺後下部ニ濁音アリ。呼吸音消失シ、試験穿刺ノ結果黃色透明ノ滲出液ヲ得タ。依ツテ入院觀察シタルニ肺ノ陰影ハ左肺門部カラ次第ニ肺尖部ニ擴ガリ、11月ニハ左肺全部ニ及ブニ至ツタ。結核菌培養ニテ陽性、人工氣胸ヲ施行シタ。然ルニ陰影ハ漸次吸收セラレ、1年後ニハ左肺上野ニ僅カニ硬化性ノ陰影ヲ認ムルニ至リ、赤沈速度モ漸次正常ニ復シ、2年後ニハ全ク正常トナツタ。發病3年後ノ昭和12年4月以來全ク治癒シテ登校シテ居ル。

其ノ他肺門ニアル結核ニ冒サレタ淋巴腺カ軟化シ、破レテ氣管ニ入り擴ガル如キ像ヲ呈スル事ガアル。此ノ時モ淋巴腺ヨリ直接周圍ノ肺組織ニ浸潤性ニ擴ガル事モアル。初感染浸潤ヨリモソノ周圍ニ浸潤性ニ接續シテ擴大スルモノト軟化崩解シテ其ノ周圍ニ局限シテ然シ散在性ニ氣管播種ヲツクルモノトニツノ場合ガアル。

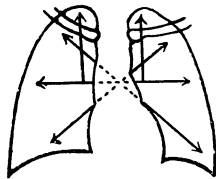
(3) 初感染竈又ハ淋巴腺ヨリ其ノ病竈自身が擴大スルノミナラズ轉移ニヨリテ一個所又ハ數ヶ所ニ殆ンド同時ニ浸潤ヲ生ジテ肺癆トナルモノ

第1例 22—23歳 社員妻

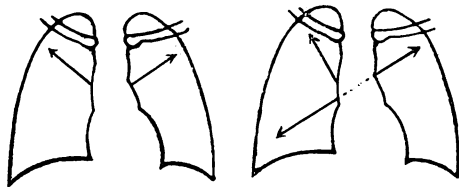
昭和11年2月、右側胸痛及ビ肩凝ヲ訴ヘテ外來ヲ訪レタ。當時胸部レ線像ハ全ク正常デ、「ツベルクリン」反應陰性、赤沈速度110耗ヲ示シタ。初感染症トシテ約1ヶ月間外來治療ヲ受ケタ。然ルニ6月初旬感

冒=罹リ殊=朝四肢ノ關節痛ヲ訴ヘテ再ビ外來ヲ訪レタ。當時赤沈速度 129 耗、「ツベルクリン」反應ハ陽性=轉化シ 20×20 耗トナツタガ、胸部レ線像ニハ異常ヲ認メナカツタ。9 月中旬突然 40 度迄發熱シ、赤沈速度 30 耗トナリ、胸部レ線像ニハ左肺上部=浸潤性陰影現ハレ、中ニ櫻實大ノ軟化部ヲ認メタ。更ニ 10 月ニハ右肺門部近クニ中ニ胡桃大ノ空洞ノアル陰影が現ハレタ。喀痰中結核菌陽性トナツタ。依ツテ入院後人工氣胸術ヲ施行シタガ、短期間ニ急性ニ増悪シ、僅カ 1 年間ニ不幸ノ轉歸ヲ取ルニ至ツタ。是等ノ氣管枝播種ニヨリ轉移スル方向ニハ一定ノ規則ガアル。即チ次ノ模型圖ニ示ス如キ方向ヲトル。

氣管枝播種ノ擴ガリ方ノ模型圖

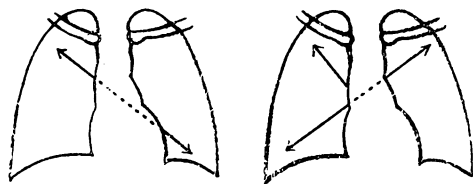


各型ヲ實例ニテ示セバ次ノ如クデアル。



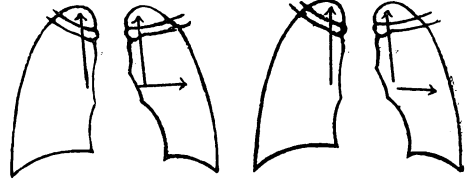
第 2 例

第 1 例



第 4 例

第 3 例



第 5 例(2)

第 5 例(1)

昭和 12 年 11 月 1 日

昭和 7 年 6 月 1 日

是等ハ皆未感染者ニ發生シタモノデアアルガ、團體検査ニ於テハ石灰化ガアリ、又ハ既ニ「ツベルクリン」反應陽性デ一度結核ヲ經過シタモノカラハ舊病竈或ハ其ノ附近カラ浸潤ヲ現ハシテ來タモノモアル。併シ之ハ多クハ良性デ、少シ安靜ニスルト割合ニ早ク吸收シ、余等ノ觀察中ニ肺癆ニ發展シタモノハ僅カニ 3 例ニ過ギナイ。併シ是等ヲ再感染トスレバ再感染肺癆ハ本邦デハ非常ニ少ナイモノデアアル。此ノ類ニ屬スルモノハ相當ノ數ニ上ルガ、多クハ肺結核ニナツテカラ始メテ求診シ來ルモノデアアル。即チ全然既往症ナクシテ初メテ肺結核ニナツタ様ナ患者デ新シイ浸潤ト共ニ石灰化シタ舊イ病竈アル患者ハ可成リ多數アルガ、是等ハ患者ノ生活ニ何か無理ノアル時ニ發生スルノデアラウ。或ハ自覺症ナク病ハ初感染カラ連續シテ居リツ、一部石灰化シタモノトモ考ヘラレル。併シ再燃シタ當初ニ於テ適當ノ處置ヲトル時ハ肺癆ニ移行スル事ハ非常ニ少イモノデアアル。

(4) 肺門ノ淋巴腺カラカ又ハ初感染浸潤何レカ

ヨリ氣管内播種ニヨリ遠方ニ散在性ニ擴ガレルモノ

(A) (a) 汎發性ニ散在シテ來ルモノ、其ノ最モ急激ニ且ツ重症ナモノハ兩肺一面ニ小陰影アリテ一寸粟粒結核ノ如ク見エルモノデ、大抵1年、時ニハ半年位ノ間ニ死亡スル。衛生状態ノ佳良デナイ處、誤ツタ處置ヲ施サレタ時等本邦ニ於テ時々之ヲ見ル。時ニハ適當ナ處置ニ依リ治癒スル事モアル。又屢々肋膜炎ト殆ンド同様ニ來ル事モアル。

(β) 時ニハ以上ノ如キモノガ一側ノミニ來ル事モアリ、又肺ノ一部ニ局限シテ來ル事モアル。又兩肺ニ散在スルガ、小サナ陰影ガ數少ナク諸所ニ見出サレル。

(β) ハ(A) (a) ノ輕症ノモノデアルガ、歐米ノ學者ノ血行撒布ノ治癒シタモノトシテ報告シタモノハ多ク斯ノ如キモノノ癍痕ヲシイ。

(A)ノ(a) 18歳 看護婦生徒
昭和11年3月入學ノ時ハ皮内反應6耗、赤沈速度15耗、線像モ正常デアツタ、同年10月4日ニハ尙「ツベルクリン」反應5耗デアツタガ、翌年3月6日ニハ、「ツベルクリン」反應28×30耗赤沈速度13耗右側肺門多少大デアツタ。3月20日、赤沈速度80耗線像ハ肋膜炎ヲ示シ、一部ヲ見レバ氣管播種ノ像ガアル。氣管播種一面ニ肺野ヲ掩フテ居ル。昭和12年4月14日、赤沈速度64耗、皮内反應35耗トナリ、6月12日ニハ途ニ死亡シタ。

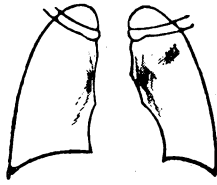
(A)ノ(β) 第1例 19歳 看護婦生徒
1930年4月入學、1931年4月「ツベルクリン」反應5×6耗、9月13日「ツベルクリン」反應20×20耗、8月24日咳嗽、熱感アリ左側第一肋間ニ囉音アリ、左側胸肋所ニ散在セル小浸潤ガアル。右側ニハ之ガナク正常ニ見ラレル。

第2例 19歳 看護婦生徒
1933年3月入學、當時ヨリ1933年9月迄「ツベルクリン」反應陰性、線像正常ナリシモ10月熱感アリ、34年1月「ツベルクリン」反應38×38耗、赤沈速度84耗、X線像ニ肺野諸所ニ散在性ニ少數ノ極メテ小ナル病竈アリ。

(B)初感染竈ヨリ肺尖部ニ氣管枝性ニ播種ヲ生ジテ之ヨリ下行性ニ擴ガレルモノ、嚴密ニ云ヘバA、βニ屬スルモノデアルガ最モ屢々遭遇シ、又之レヨリ肺癆ヲ發生スル事ガ時々アルカラ特ニ此ノ項目ヲツクル。今例ヲ以テ示ス事トスル。

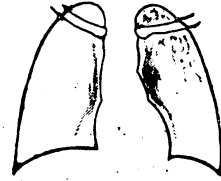
第1例 15—16歳 女學生
1937年5月12日及ビ10月11日ノ検査ニ於テハ「ツベルクリン」皮内反應夫々4×4耗及2×2耗、赤沈速度モ夫々10耗及ビ20耗デアツタガ、1938年4月中旬カラ食慾不振、全身倦怠アツタ。尙登校ヲ續ケテ居タ所ガ5月15日ノ身體検査ニ體溫38度、軽度ノ咳嗽アリ、1938年5月19日、「ツベルクリン」皮内反應34×20耗、赤沈速度146耗、初感染ト診斷セラレテ入院シタ。左側第二肋間外側ニ近ク小指頭大ノ浸潤ガアル。之ニ對スル肺門ノ淋巴腺多少腫大シテ居ル。此ノ時既ニ喀痰培養ガ陽性デアツタ。6月23日赤沈速度50耗、浸潤ハ擴大シ周圍ニ點々ト播種ノ像ヲ示シテ居ル。喀痰培養矢張陽性デアル。8月29日「ツベルクリン」皮内反應41×36耗、赤沈速度50耗、浸潤ハ尙長クナリ、尙肺門ノ處ヨリ肺尖ニ向ツテ浸潤ガ伸ビツ、アル状態ニナツテ居ル。9月29日赤沈速度80耗、浸潤ハ肺尖ニ至ツテ居リ、赤沈速度モ増加シテ居ル。間モナク左側ニ滲出性肋膜炎ガ起ツタ。之ガ吸收後浸潤ハ尙擴ガリ右側肺野ノ下部ニモ數多ノ小浸潤ガ現ハレテ居リ左側ハ肺野ノ中部及ビ下部ニモ散在シテ小浸潤ガアル。1939年6月15日赤沈速度38耗、喀痰培養陽性デアル。此ノ例ニ於テハ肺野内ノ初感染竈ヨリ氣管ニ沿ヒ肺門ヲ經テ上行シ肺尖ニ至リ、更ニ下方ニ擴ガル状態ガ如實ニ示サレテ居ル。此ノ如キ例ニ吾等ハ屢々遭遇シタ。

第2例 16—21歳
昭和9年4月中旬發熱、左側滲出性肋膜炎ト診斷セラレ。7月3日第二肋間ニ母指頭大ノ陰影アリ之ニ對スル淋巴腺腫大ス。赤沈速度31耗、「ツベルクリン」皮内反應10×15耗、同年10月2日、肺尖ニ移行ス。赤沈速度28耗、「ツベルクリン」皮内反應35×26耗。昭和11年2月7日播種現ハル。赤沈速度21耗、「ツベルクリン」皮内反應35×28耗。11月5日下行性ニ播種ス。赤沈速度35耗、「ツベルクリン」皮内反應20×10耗、結核菌少數。



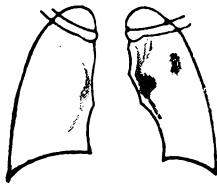
7/VI, '34

赤沈速度 31
 「ツベルクリン」反應 10×15
 胸部レ線像 左中野=栗實大ノ浸潤アリ
 兩側肺門淋巴腺モ著明=腫脹ス。雙極性初感染竈



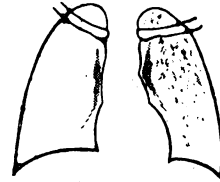
25/II, '36

赤沈速度 21
 「ツベルクリン」反應 25×30
 補體結合反應 (-)
 胸部レ線像 肺尖部ヨリ漸次下行シ、肺
 上野=多數ノ浸潤現ハル。



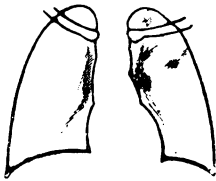
7/VII, '34

赤沈速度 15
 「ツベルクリン」反應 14×15
 胸部レ線像 浸潤多少吸收ス、併シ肺門
 ヨリ上方=向ヒ浸潤ノ進ム疑アリ。



23/XII, '37

赤沈速度 34
 「ツベルクリン」反應 20×20
 補體結合反應 (-)
 喀痰中結核菌 陽性
 胸部レ線像 陰影ハ更ニ下行シ肺中野ニ
 及ブ。



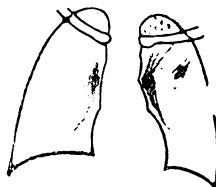
2/X, '34

赤沈速度 28
 「ツベルクリン」反應 35×26
 補體結合反應 (-)
 胸部レ線像 浸潤ハ尙吸收シタルモ左肺
 尖=向ツテ進ム模様明カトナル。



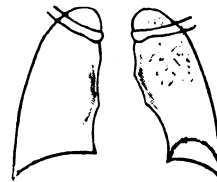
21/I, '38

赤沈速度 47
 「ツベルクリン」反應 30×27
 補體結合反應 (-)
 喀痰中結核菌 陽性
 胸部レ線像 小サキ散在性ノ陰影左肺全
 野ニアリ。



7/II, '36

赤沈速度 21
 「ツベルクリン」反應 35×28
 補結反應 (-)
 胸部レ線像 左肺尖部=點狀ノ陰影多數
 現ハル。

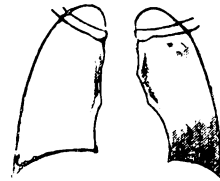


15/VII, '39

赤沈速度 7
 「ツベルクリン」反應 37×28
 補體結合反應 (H)
 喀痰中結核菌 陽性
 胸部レ線像 陰影ハ吸收シ硬化性ノ線狀
 ノ癍痕ヲ多數殘ス。

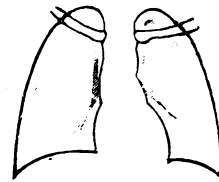
第 3 例 23—26 歳 醫師

昭和 11 年 4, 6, 8 月及 9 月行ツタ「ツベルクリン」皮内反應ハ皆 0×0、同年 10 月 20 日ニハ微熱アリ咳嗽、喀痰ヲ訴ヘ、「ツベルクリン」皮内反應、0×0 赤沈速度 7 耗、同年 11 月 14 日ニハ體温 38 度、赤沈速度 50 耗、「ツベルクリン」皮内反應 43×43 耗、レ線像殆ンド正常。昭和 12 年 1 月 28 日左側肋膜炎、試驗穿刺陽性、其ノ後 4 回ニ互リ 3600cc 排除ス。同年 5 月 13 日雙極性ノ陰影アリ、赤沈速度 30 耗。8 月ニハ赤沈速度 22 耗、陰影肺炎ニ現ハレタ。昭和 13 年 4 月 2 日、赤沈速度 60 耗「ツベルクリン」皮内反應 53×53 耗。陰影ハ左側肺野上半部ニ散在スル様ニナツタ。



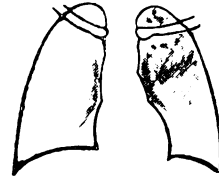
7/VIII, '37

赤沈速度 50
胸部レ線像 左側下部ニ肋膜炎ノ陰影アリ、鎖骨下ノ浸潤尙多少増大シ中央ハ軟化ス。



2/X, '37

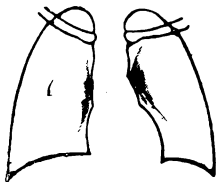
赤沈速度 26
「ツベルクリン」反應 40×40
胸部レ線像 肋膜炎滲出物ハ吸收セルモ左側鎖骨下ノ陰影ハ擴大シ肺炎ニ及ブ。



2/IV, '38

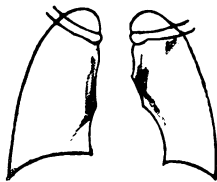
赤沈速度 60
「ツベルクリン」反應 53×53
喀痰中結核菌 陽性
胸部レ線像 肺炎部ノ陰影ハ漸次下行シテ左肺中野ニ及ブ。

共ニ左側上葉ニアル初感染竈ヨリ漸次上昇シテ同側肺炎ニ至リ、更ニ下降スル有様ヲ示スコトガ出來ル。小ナル密集セル陰影自身モ血行撒布ノ如キ繊細ノモノテナク粗大デ可成リ炎衝性ナル。此ノ時肺下野ニ初感染病竈アルモノモアルガ最モ屢々此ノ經過ヲトルモノハ夫レガ肺上野ニアル初感染竈カラデアアル。「テンボ」ノ早イモノハ上行シ、更ニ下行シテ數ヶ月ニテ既ニ肺癆トナル。斯ノ如キモノハ今日迄初メ病竈ヨリ血行ニヨリテ肺炎ニ轉移ヲ生ジ、茲ニ病機ガ始マルト解釋セラレタガ、現在氣管内ニ結核菌ガ常ニアリ、呼吸又ハ咳嗽等ニヨリ肺ノ此處彼處ニ運搬セラレルカラ氣管性ニ擴ガツタト考ヘタ方ガ妥當ナ解釋デアラウ。



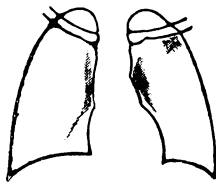
14/XI, '36

體温 38°
赤沈速度 50
「ツベルクリン」反應 43×43
胸部レ線像 左肺門淋巴腺多少腫脹ス。



28/I, '37

赤沈速度 45
胸部レ線像 左鎖骨下ニ粟實大ノ浸潤現ハル。即チ雙極性初感染竈ナリ。



21/V, '37

赤沈速度 30
胸部レ線像 鎖骨下ノ浸潤即チ初感染浸潤中央軟化ス。

若シ氣管内＝常ニ細菌ガアレバ之ガ他側＝入り他側ノ肺尖又ハ其ノ他ノ部分ニ轉移ヲ生ジテモ不思議ハナイ。初感染患者ニ於テ第 1 例ニ見ル如ク結核菌ガ氣管内ニ徘徊シテ肋膜炎後ニモ同ジク證明セラレタモノデアアル。是等ハ途ニ肺癆ニ迄移行レタ。

次ニ初メ結核菌ガ證明セラレタガ肋膜炎發生ト共ニ消失シ初感染竈モ吸收セラレタ例ヲ擧ゲヤウ。

第 1 例 ■■■■■ 20—21 歳

1937 年 2 月 14 日微熱アリ赤沈速度 13 耗、試験穿刺陰性、同年 3 月 20 日入學試験ノ爲メ東京ニ行キ、27 日歸宅シタルニ、全身倦怠アリ、赤沈速度 30 耗、左側胸痛アリ。1937 年 4 月 13 日、赤沈速度 100 耗、體温 37.2 度、皮内反應 22×24 耗、喀痰培養陽性。4 月 20 日、赤沈速度 65 耗、穿刺 900 廻、喀痰培養陰性。5 月 1 日、赤沈速度 80 耗、滲出液排除 240 廻、穿刺 500 廻、11 月 1 日、赤沈速度 16 耗、皮内反應 45×39 耗、喀痰培養陰性。

次ノ例ハ結核菌ガ培養テ澤山證明セラレタモノガ肋膜炎ニ至リ非常ニ少ナクナツタモノデアアル。

第 2 例 ■■■■■ 小學生 12 歳

1938 年 6 月上旬ヨリ惡寒及ビ左側胸痛アリ、發熱 38—9 度數日持續シタノテ 7 月 19 日外來ヲ訪レタ。左側副氣管淋巴腺大ニ腫脹シテ居タガ赤沈速度 10 耗、「ツベルクリン」反應 32×26 耗、喀痰培養無數、體温 37.5—37.2 度、漸次ニシテ下熱シ、一般症狀モ大ニ輕快シタ。然シ喀痰培養ハ無數ノ聚落ヲ示シ、前途憂慮スベキ状態デアツタガ 9 月 24 日、突然發熱 39 度ニ及ビ胸膜炎ヲ併發シタ。赤沈速度 64 耗、「ツベルクリン」皮内反應 30×27 耗、喀痰培養 2 本 1 聚落、12 月中旬下熱シ、赤沈速度モ 8 耗トナリ淋巴腺モ大ニ縮少シ、喀痰培養モ反復之ヲ行ツタガ陰性カ又ハ陽性ニテモ唯數個ノ聚落ヲ得ルニ過ギズ、39 年 3 月、皮内反應 40×35 耗、赤沈速度 8 耗トナリ、正常ニ復シタ。

此ノ例ニヨリテモ既述ノ肋膜炎ハ時々初感染ノ經過良好ニ影響スルモノナル事ガ判ル。又肋膜炎ハ血行ニヨリテ生ズルト云フ歐米人ノ説ノ誤デアアル事ハ肋膜炎患者ノ血液中ニ菌ヲ證明スル事ガ出來ナイ事ニヨリテモ其ノ不當ナ事が明カテ、肋膜炎ノ發生ノ恐ラクハ病竈ガ眞接肋膜炎ニ達シタ爲ニ起リ、之ガ却テ病竈ヨリ結核菌ノ血行ニ入ルヲ防グ傾向アル事ガ判ル。初感染後經過良好ノモノガ感染後約 2 年モ經テ忽然トシテ肺炎ニ局限セル陰影ヲ現ハス事ガアル。之ハ昔カラ

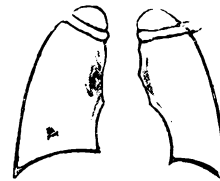
血行性ニ來ルモノテ頗ル良性ノモノト稱セラレテ居タモノデアアル。元來斯ノ如キ時ハ患者個體ノ抵抗力ノ多イ時ニ來ルモノテ、此ノ時疾病ノ經過ハ既ニ頗ル緩慢ナ經過ヲトツテキル一段階ニ過ギズ、「テンボ」ノ遅イ爲メニ良性ニ見エルモノデアアル。體力ガ減弱スレバ惡化シ得ルハ自明ノ理デアアル。次ノ例ノ如キハ此ノ類デアアル。

第 1 例 ■■■■■ 22 歳

1935 年 3 月當大學醫學部附屬醫院看護婦生徒トシテ入學、入學時皮内反應 6×6 耗、赤沈速度 20 耗、X 線像正常、7 月 26 日、皮内反應 20×21 耗、赤沈速度 13 耗、X 線像殆ソド正常、其ノ後赤沈速度 7—20 耗、1938 年來肩凝アリ、X 線像ヲ見ルニ、左鎖骨上ニ小陰影アラハレ、其ノ後半年間ニテ硬化シテ來タ。此ノ例ニ於テハ喀痰培養ハ行ハナカッタ。

第 2 例 ■■■■■ 19 歳 看護婦

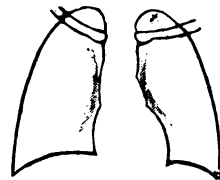
1935 年 3 月入學、6 月皮内反應 6×6 耗、赤沈速度 29 耗、12 月 13 日、皮内反應 47×48 耗、赤沈速度 53 耗、右側肺門淋巴腺僅カニ腫脹シテ右肺下野ニ小ナル浸潤ガアル。之ハ 1936 年 5 月既ニ吸收シテ仕舞ツタガ 1938 年 11 月、赤沈速度 51 耗、喀痰ノ結核菌培養陽性トナルト同時ニ左肺尖ニ小ナル浸潤出現シ、1939 年 1 月尙數回培養陽性、其ノ後或ハ陰性トナツテ居ル。最近コノ浸潤ハ多少石灰化シテ來テ居ル。



13/XII, '35

赤沈速度 53
「ツベルクリン」反應 47×48

胸部レ線像 右肺門淋巴腺僅カニ腫脹シテ右肺下野ニ極メテ小ナル浸潤アリ。



2/XII, '38

赤沈速度 28
「ツベルクリン」反應 40×34

喀痰中結核菌 培養陽性
胸部レ線像 左肺尖ニ小ナル浸潤現ハル

又石灰化シタ病竈カラモスクノ如キ轉移ヲ生ズル事ガアル。

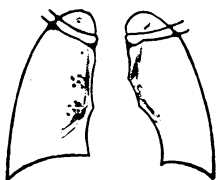
第 1 例 ████████ 女學生

1937年5月女學校入學後ノ最初ノ體格検査テ赤沈速度12耗、「ツベルクリン」皮内反應44×54耗、右側肺中野側方ニ小ナル石灰化竈ト肺門ニ大ナル石灰化竈アリ、後者ノ周圍多少浸潤シテ居ル。今年7月ニナルト赤沈速度ハ7耗タカ右肺尖ニ小浸潤ガ出現シテ居ル。之ガ1938年5月13日ニハ既ニ吸收、消失シタ。



17/V, '37

赤沈速度 12
「ツベルクリン」反應 44×54
補體結合反應 (一)
胸部 X線像 右肺ニ石灰化セル初感染群アリ。



14/VII, '37

赤沈速度 7
「ツベルクリン」反應 40×50
補體結合反應 (一)
胸部 X線像 兩肺尖ニ點狀ノ陰影現ハル

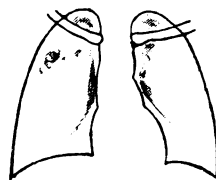
此ノ例ニ於テハ喀痰培養ハ施行サレナカツタガ恐ラクハ他ノ諸例ヨリ推測スルト、時ニハ培養陽性デアツタト考ヘテモ差支ナカラウ。

既ニ屢々述べタ如ク衛生状態不良ニシテ個體ノ抵抗力弱キ時初感染竈ヨリ直チニ肺癆ニ移行スルモノデアルガ、一般ニ個體ノ抵抗強キ時ハ肺尖ノ方ニ進ムモノデアル。先ヅ茲ニ病竈ヲツクル事ヲ述べタガ是ニ由リテ之ヲ觀レバコノ肺尖ニ近キ病竈ノ發生スルコトハ即チソノ個體ノ比較ノ抵抗力アリ經過モ可良ナルベキヲ示シテキル故ニ、是等ノ病竈ハ又治癒シ易イノハ自明ノ

理デアル。其ノ治癒石灰化シタルモノハ即チシモン氏病竈トシテ周知ノモノデアル。肺尖ノ石灰化竈ハ斯ノ如キモノノ治癒シタモノデアル。所謂シモンノ病竈ナルモノガ既ニ述べタ例ノ如ク發生シタモノナル事ハ次ニ示ス例ニヨリテ見ルト進行シテ治癒シタ痕跡ガ歴然トシテキル。

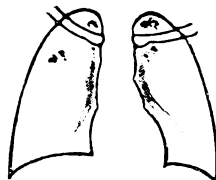
第 2 例 ████████ 17-22 歳

患者ハ昭和2年春突然咯血シテ入院シタ。早期浸潤トシテ氣胸療法ヲ受ケ一旦輕快シテ退院シ再就學セルモ昭和4年9月2日突然再咯血シテ入院シタ。右ニ初感染竈アリテ左肺門ヨリ肺尖ニ上昇シタル事ガ推知セラル。赤沈速度32耗。「ツベルクリン」皮内反應陽性。喀痰中結核菌陽性デアツタ。入院後9ヶ月ニテ無菌トナリテ退院、昭和6年3月ニハ初感染竈モ左側肺尖ノ病竈モ完全ニ石灰化シテ今日迄全ク健康デア



28/IX, '27

赤沈速度 32
「ツベルクリン」反應 陽性
喀痰中結核菌 陽性
胸部 X線像 右肺上野ニ浸潤アリ、ソノ他兩側肺門ヨリ肺尖ニ連續セル浸潤アリ。



20/III, '31

赤沈速度 10
「ツベルクリン」反應 15×15
胸部 X線像 右肺上野ニ石灰化竈アリ、兩側肺尖ニ石灰化竈アリ、ソレヨリ肺門ニ連續セル石灰化竈ノ鎖アリ。

是等ノ例ニ於テハ初感染竈ガ石灰化シテモ尙一部治癒シ切レヌ所ガアツテ氣管ニ結核菌ガ出ルタメニ斯ノ如キ轉移ヲ生ズルモノデアラウ。斯ノ如ク解釋スレバ肺結核發生ニ關スル所謂舊

派ノ考ヘモ新派ノ云フ所モ共ニ眞理ノ一面又ハ事實ノ一部ヲ云フテキル事ガ判ル。即チ常ニ又ハ時々氣管内ニ出ル結核菌ニヨリ肺尖ニ轉移ヲ生ジ、夫レヨリ下降性ニ病竈ヲ作ル。此進行ガ遅イ時ハ肺尖ノ病竈ハ既ニ一部ハ石灰化シテ居ル。之ハ病理解剖的ニ定型的ノ再感染肺癆デアアル。初感染浸潤ヨリ浸潤性ニ進行スルモノハ極初期ヨリ見テ居ルノデナケレバ所謂早期浸潤ト區別ガ出來ナイ。又此ノ氣管播種デ一旦治癒シテ癥痕トナツタ様ニ見エ、再燃シテ浸潤ヲ生ズル時ハ所謂早期浸潤又ハ再燃浸潤ト一致スル。之ハ新派ノ説ト一致スル如ク見エル。

然ラバ何故ニ好シク結核ハ肺尖ニ占據スルカト云フニ今ヨリ 3, 40 年前之ニ關スル説又ハ實驗ガ山ノ様ニ出タ、一時忘レラレテ居タガ、是等ノモノヲ復活スル事ガ出來ル。例ヘバ油煤ヲ吸入セシメル時何處ヘデモ一様ニ行キ渡ルガ放置スレバ最モ遅ク迄肺尖ニ殘ル。我教室ニ於テ嘗テ斯ノ如キ實驗ヲシタコトガアルガ茲ニ示ス如ク肺尖ト他ノ部ノ顯著ナ差ガアル。此ノ動物實驗ノ標本ヲ茲ニ示説スル。

實驗標本供覽

以上ハ主トシテ氣管播種ニ就イテ述ベタガ之レニ反シ血行撒布ハ割合ニヨク吸收サレ、時ニ一部、特ニ後ニ肺尖ニ癥痕又ハ癥痕ニ包裡セラレタ空洞ヲ殘スノヲ見ルガ、余ハ十數年間注意シテ觀察ヲ行ツタガ、西洋ノ學者ノ云フ如ク、之ヨリ下降性ニ浸潤性ノ肺癆ノ形成サレルノヲ見タコトガナイ。之ニ反シ、此ノ様ナ患者ハ屢々腎臟結核、骨結核、肺外結核等ヲ起ス肋膜炎後ニ來ル肺結核ハ西洋人ノ云フ如ク血行撒布ヨリ生セズ、余等ノ見タルモノハ皆初感染竈又ハ其ノ氣管性ニ來タ轉移ヨリ生ジタ像ヲ呈シテ居タ。

第 1 例 13—14 歳

1933 年 12 月末頃ヨリ感冒ニ罹リ、安靜ニシテ居タガ、1934 年 1 月、活動見物ニ行キシタメ高熱ヲ發シ、肺炎ノ診斷ノ下ニ入院シ來ル。赤沈速度 57 耗、皮内反應、20×20、喀痰ナク尿正常。X 線像ヲ見ルト、左ノ肺門淋巴腺ハ著シク腫大シ、肺野一面ニ粟粒結核ノ如

キ觀ヲ呈シテキル。入院後下熱シ、赤沈速度 20 耗トナリ、3 月末一旦退院シタルモ、同年 11 月再ビ發熱シテ再入院。X 線像ハ以前ト殆ンド同様ナルモ、尿ニ白血球多ク、蛋白中等度、結核菌ヲ證明シ、漸次衰弱シテ死亡シタ。赤沈速度 58 耗、皮内反應 51×35 耗、右野中野ニ多少肺炎様ニナツテ居ルガ大體初メノ様デアアル。

又斯ノ如キ血行撒布ハ非常ニヨク、時ニハ知ラヌ間ニ、吸收スル事ガアル。併シ肺ノ結核性變化吸收シテ殆ンドソノ變化ヲ認メヌ様ニナツテカラ腎臟等ニ肺外結核ヲ起ス事ガアル。次ニ實例ヲ示ス。

第 2 例 學生 16—18 歳

1934 年 7 月、感冒ニ罹リ、發熱、食慾不振アリ、1935 年、1 月 22 日入院。赤沈速度 100 耗、皮内反應 20×15 耗、喀痰ナシ、X 線像ヲ見ルニ、肺野一面粟粒様陰影ニ覆ハレテ居ル。兩側人工氣胸施行ニヨリ陰影漸次吸收シ、1 年後ニハ殆ンド痕跡ヲ認メザル様ニ吸收シタガ、赤沈速度尙 50 耗、皮内反應 27×26 耗、尿ニ白血球、赤血球増加シ、又結核菌モ證明セラレ、兩側腎臟結核ニテ 2 年後遂ニ死亡シタ。

第 3 例 農家ノ息子 18—19 歳

1933 年ノ 1 月カラ全身倦怠、咳嗽、盜汗アリ、1933 年 7 月 6 日入院。入院時、赤沈速度 93 耗、皮内反應 19×16 耗、喀痰中結核菌陽性、X 線像ヲ見ルト肺野一面ニ粟粒狀ノ陰影ニ覆ハレテキル。入院 1 年後肺ノ陰影ハ殆ンド吸收シタガ、尙肺尖ニ硬化性陰影ヲ殘シテキル。1934 年 7 月、赤沈速度 10 耗、皮内反應 23×17 耗、結核菌陰性ニテ 5 年後ノ今日ニ至ルモ變化ナク下行性ノ肺結核ヲ起シテ來タ。

斯ノ如キ血行撒布ハ一旦吸收シタ後ニ過劇ノ勞動トカ不攝生ニヨリテ再ビ撒布スル事ガアルガ、定型的浸潤性ノ肺結核ニナツタモノヲ見タ事ハナイ。

以上ニヨリ初感染ノ大體ヲ述ベタガ實地家ニトツテハ殊ニ喀痰培養ニヨリ其ノ良性、惡性即チ將來肺癆ニ遂展スル可能性ノ多イモノト然ラザルモノトヲ區別シ、適當ニ處置シ肺癆ニ至ラヌ様ニ豫防スル事ガ一程度迄ハ出來ルト思ハレル。余等ハ若シ初感染患者ニテ 2, 3 ヶ月連續培養陽性ニナレバ人工氣胸術ヲ施行スル。之ニ依リ大抵肺癆ニ遂展スル事ヲ阻止シ得タ。